
夢想少女

amin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢想少女

【Nコード】

N5776J

【作者名】

amin

【あらすじ】

ずっと憧れてた学校のマドンナは二重人格だった。

* 幻想少年と話がリンクしています。こっちは主人公サイドの物語です。

1 暑い夏の日

「悪いけど付き合えない」

高校生になって一目ぼれして、1年間の片思いの末の一大決心の告白は数秒の時間もなくバツサリと打ち切られてしまった。

1 暑い夏の日

「くそー！せめてもうちょい考えるフリくらいしてくれたって……」
「まあ諦めろ。お前に望みは1ミクロンもなかったって事だ」

俺、一之瀬春哉は高校2年で1年間片思いした女子に一世一代の告白をして見事に玉砕した。

まあ相手とは話した事もない。完全にこっちの片思いだ。
クラスも一緒じゃないし、向こうはこっちの顔を知ってるかも疑問だ。

それでも一目ぼれした俺は勝手に懂れ続け、今日こそ思ってたの告白は人生最大の悲しい歴史になった。

落ち込む俺の肩を雅氏が乱暴に叩いて励ましてる。

「でもお前が告った奴って倉田幸だろ？あいつ可愛いけど何か性格おかしいよな。友達もいねえし、ツンツンしてるしよ」

そう、告白した相手は学年のマドンナとも言われている倉田幸。マドンナと言われているくらいだからモテる、それはもう。

でもそれを全てバツサリと切る事で有名なのだ。そのさばさばし過

ぎた性格のせいから女子からも敬遠されて、友達と歩いてるのをあまり見た事がない。

“性格に難あり”と言われてるけど、そんな事どうでもよかった。ただ一目ぼれで電撃が走るって本当にあるんだなって思ったし、1年間続いたんだから偽物の気持ちじゃなかったと思う。でもそれで振られたのだ。ぐうの音も出ない。

言いふらしはされないだろうけど、もし誰かに言いふらされてたら明日から学校に行けない。

正直明日が少し怖いと思いながら、バイトに行く為に鞆を背負った。

「お、バイト？」

「そう。今週いっぱいシフトいれてっから」
「頑張れよ」

雅氏の応援に頼いて急いで教室を出る。そのままチャリ置き場に行つてチャリに乗ってかつとばす。

時間まではまだ余裕があるけど、早めに行つて色々準備をしなきゃいけない。

ふられたショックはあるけど、それをバイトに持ち込んだらいけない。ふられた事は一時忘れてバイト先にチャリを走らせた。

数ヶ月前、俺がまだ高1だった時に、お袋が躁うつ病にかかった。

幸いまだ軽度とか医者は言ってたけど、そんなの関係なかった。

ふさぎこんだと思ったら急に切れたしたり、勿論働いてたお袋がそんな状態で仕事場に行けるはずもなく、親父とお袋で何とか生計を立ててた我が家はお袋のパートが無くなっただけで大打撃。

だから俺がお袋の分をバイトしなきゃいけないってしまった。

お袋も誰かというより、1人でいるほうが落ち着くらしく、俺が家にいない方がいいみたいだから、積極的にバイトを入れるようにし

てる。段々生活にも慣れてきて、バイト先の先輩達もいい人達だから、そこまで苦しく感じることはなかった。

ただいっお袋が元に戻るんだろう？とか考えるけど。

何が原因でなるのか分からないものだ。医者も原因は分からないと言っている。これだから精神病と言うものは厄介なのだ。いっぱい抗うつ薬や抗躁薬、睡眠薬を出されて、それを毎日飲んでるお袋が痛々しい。

早く明るかった頃のお袋に戻ってもらいたい、そう思った。

それにもしかしたら大学に行けなくなる。それが大問題だったから。親父の給料だけじゃ私立の、東京外の大学は無理だと言われて途方に暮れた。お世辞にも頭は良くない。東京の国立なんて無理だ、だから私立に行く気だった。

なのにこれじゃ都外は行けても国立。死ぬ気で勉強しない限り無理そうだ。だから何とかお袋には早く治ってもらってパートを再開してもらわねば、そう思ってた。

バイト先についた俺は先輩達に挨拶して服を着替える。仕込みをしてる先輩達の横でネギなどを切っていく。

今俺が働いてるのはラーメン屋だ。時給が結構いいからここにしたい。17時から店が開店するから皆大忙しだ。

ちなみに結構人気があつて、客も多い。忙しいから何も考えなくてもいいという訳だ。

「春哉君、看板取り替えてきて」

「はい」

先輩にそう言われて、店の外に出て仕込中と書かれた板を裏返して営業中に変える。

さあまた今から大忙しだ。

ラーメン屋は今日も中々盛況だった。

俺もオーダーを聞いたたり、皿を洗ったり、水を出したり、暇があったら具材を切ったり……そんな事をしている内に時間はどんどん過ぎていった。夜の9時、客入りも少なくなつて終了時刻が迫っていた。

先輩達からは止めに上がっていいよ、と言われて挨拶をしてバイト先を上がった。

ラーメン臭くなつてしまった服を臭つて、少し嫌な気分。

そんな時、カバンに入れてたケータイのバイブが鳴った。

着信は親父からで急いで出ると、親父も少し慌ててた。

『春哉、今日帰るのが23時くらいになるから、母さんを病院に迎えに行つてやつてくれないか？』

「はぁ？もう21時だぜ」

『今日は患者が多くて先生も19時までには受け付けした人全てを見てるんだが、母さんがまだ終わつてないらしくてな。まあ長引くかな』

「ふーん、わかった」

医者も大変だなあ、時間外労働なのに。

病院に行つて待つてなきやいけないので、服を着替えて再びチャリに跨った。外の風は生ぬるく蒸し暑い。

チャリを漕げば、すぐに汗があふれてきた。

病院のドアを開けると、看護師さんに注意されたが、お袋の事を話したら待つてもいいって言ってくれた。お袋は今見てもらってるらしく、待合室には誰もいない。

ドスツと椅子に腰かけてケータイをいじっていると診察室2のドア

が開いた。

もう終わったのかな？早くないか？

そう思つて顔を上げた先には予想外の人が立っていた。

「え、倉田さん……」

「あ」

何で倉田さん！？

倉田さんもさすがに今日の事を忘れてなかったらしく、俺の顔を見るなり気まずそうに顔を逸らした。

え？こつて精神病院だよな。何で倉田さんがここに？倉田さんもうつ病だったりするんだろうか？

憧れの人には不釣り合いすぎる場所。倉田さんがいるのには相応しくない。

倉田さんは看護師に呼ばれて、お金を払つとこつちに歩いてきた。

「誰にも言つなよ」

「え？」

「ここにあたしがいる事。誰にも言つな」

「そ、それはわかつてるけど……何で倉田さんはここに？」

そりゃ誰にも言つてほしくないだろう。

俺だつて自分が精神科に行つてるって誰かに言われたくなんかない。こつちの質問の返事はせずに、倉田さんは少しだけ表情を緩めた。

「ありがと。言われると困るんだよね」

「そりゃな……」

「あんたは何でここに居んの？」

初めてまともに話した会話。飛び上がるほど嬉しいのに場所が場所

だ。

しかも俺まで病気だと勘違いされてるな。

でもお袋の事言ってるいいのか？そう思ったけど、まあ全てを言わなきゃいいやと思った。

「家族の迎えだよ」

「……そう」

少しだけ倉田さんの表情が変わる。悲しそうな、泣きそうな……そんな表情だった。

倉田さんは何も言わずに、そのまま病院を出ていった。残された俺はその姿を茫然と眺めてた。

暫くして、先生に支えられながらお袋が戻ってきた。

涙を流して看護師にあやされてるお袋を余所に、医師が俺に近づいてきた。

「春哉君、お母さんに頼ったら駄目だよ」

「頼る？どう言う事ですか？」

「責任感の強い人だから煮詰めてるんだ。君に頼まれると断りたくない。でも今の自分は何もできない、それが悔しい、そうして悪循環してるんだ」

「……そうですか」

頼ったか？俺は。むしろ一人で何でもやれてる気がするんだけどな。バイトもしてるし、暇があればお袋の分も飯を作る。

高校の弁当は少しでも安上がりにする為に、朝早く起きて自分で作るようにもなった。

自分では完璧だと思ってるんだけど。

でも先生の話には続きがあった。

「情けなく思ってるんだ。何もできなくなった自分が、君に頼られる事のなくなつた自分は要らない人間だと思ってる」

「そんなこと……」

「君は気を遣ってるんだろうけど、彼女はそれが重荷になってる。でも頼られればそれも重荷になる。難しいだろうけど、コミュニケーションはちゃんと取ってくれ」

「わかりました」

医師に頭を下げて、お袋のカバンを持ち、金を払って病院を出た。

お袋の手を引いて帰る。

手を繋いで帰るのは恥ずかしかったけど、後ろでめそめそ泣き続ける母親を放つとける子どもがいる訳がない。

これだから大変なんだ、どんなに努力しても上手くいかない。大変だ。

お袋と俺のカバンを乗せてる自転車が酷く重く感じた。

何かが変わる木曜日、

それは構える余裕もなくやってくる。

2 偽物の君

あの日、倉田さんと出会ってから倉田さんの印象がずいぶん変わった。

ツンツンしてるって言うか、人を避けてるように思える。

でも別に俺と倉田さんの関係が何か変わると言うのは全くなかった。

2 偽物の君

今日もラーメン屋のバイトが終わってチャリで家に帰る。今が19時だから、急いで帰って夕飯作れば20時くらいに飯にありつけるだろう。

ラーメン屋で賄いは出してくれるのだが、お袋がいるからという理由で大体食えずに帰る。少しもつたいないけどしょうがない。

6月は本当に暑いから嫌だ。汗も吹き出るし、これからもつと熱くなると思うと正直萎える。

チャリを漕ぎながら夕飯の事を考えた。我ながら高校生の分際で随分主婦のようになってしまった。そう思いながら。

案の定家には何もすることなくボーっとしてるお袋の姿。食べたい物を聞くと何でもいいと言うので、適当に作る事にした。

親父はまた残業なのか家にまだ帰ってない。とりあえず親父の分も作っとくか。

適当に野菜を切って肉を入れて塩とコショウでいためて……野菜炒めとー後はあさがあつたかな？それと冷凍されといったご飯解凍すればいいか。

お袋がノロノロと立ち上がり、少し危なっかしい手つきで皿を並べていく。

お袋も頑張ってたよな。

頼ったらいけないけど、何でも自分1人でやったらいけないい。

医師に言われた言葉を頭の中で半濁して、出した結論は簡単な事をやってもらおうと思った。

「お袋、できれば大きめの皿出してくんね？これ入れるから」

「うん」

お袋はそれだけしか言わなかったけど、自分がやってた事を中断して、これまた危なっかしい手つきで皿を探し始める。
それを俺の横に持ってきた。

「ありがとう」

「……うん」

僅かにだが笑ったように見えたのは俺の気のせいなのか？

でもそんな事はどうでもいい。お袋と会話すること成功(?)した事を密かに喜んでいた。

夜の1時、飯も食い終わって明日の準備をする為に風呂に入って歯を磨いてベッドに潜り込んだ。

眠気はすぐに訪れて、俺はすぐにウトウトしだした。

明日はバイトがない日だ、久しぶりにゆっくりできる。早く家に帰ろつか。お袋と話す内容考えなきゃなあ……

「やっべーケータイ忘れた！」

次の日、学校で昼飯を食い終わって5限が今から始まるちょっと前、ケータイを屋上に置いてきた事に気付いた。雅氏に取りに行ってくる！と言って急いで屋上に繋がる階段を走る。

屋上は普段は鍵がかかっているんだけど、昼休み限定で鍵が開いてる。って言うのはちょっと違って、昼休みに教師が鍵を開けて、鍵を閉めるのは放課後。つまり昼からずっと開いてるのだ。階段を駆け上がって、屋上の扉を開ける。

やっぱり生徒は誰もおらず、座ってた場所を確認するとケータイを落とした。見した。

それを取って帰ろうと思った俺は反対側に人影があるのに気付いた。そつと覗きこんだ場所には倉田さんがいた。

「倉田さん」

「あ、あんたこないだの……また会ったね」

本当に。片思いしてた時は廊下ですれ違うことすらあんまりなかったのに、ふられてからこんな状況は酷過ぎる。

何となくそのままバイバイも言いにくかったので、俺は軽く会話をすること敢行する。

「授業は？もう始まるけど」

「出ない。今日はそんな気分じゃない」

またバツサリ切られて会話が途切れてしまった。倉田さんは無駄に何かを話す事はない。気まずく感じてるのは俺だけなんだろうか？その空気に耐えきれず、教室に戻ろうとした。

まだ授業開始時間じゃないから大丈夫だ。

そのまま挨拶して屋上を出ようとした俺に、不意に倉田さんが話し

かけてきた。

「昨日さあ、家族の迎えって言ってたじゃん。家族何か病気なの？」

倉田さんは昨日何であそこにいたかを知りたいようだ。
でも正直、これは余り言いたい話じゃない。

「そう言うのはちょっと……」

「ああ、ごめん。悪気はなかったんだけどさ、あたしとあんた同じかなあって思ってた」

同じ？俺と倉田さんが？

じゃあ倉田さんも家族の迎えだったのか？でも1人で病院にいたし、金も自分で払ってた事から、家族の誰かって訳じゃなさそうだけど。今度は俺が気になって倉田さんに問いかける。

「倉田さんこそ何で行ってたんだ？倉田さんも……その」

「半分あって半分間違い。あたしは何の疾患もない」

「じゃあ……」あるのはもう1人のあたし」

は？もう1人のあたし？それはどういう意味だ？

倉田さんは双子なのか？それとも誰か兄弟？姉貴でもいるのか？

分からない顔をしている俺を見て、倉田さんが笑う。マドンナと言われるだけあって、やっぱり倉田さんは可愛い。

「昨日あんた見てさ、あたしと同じだと思ったんだよね。めんどいよね、精神病患ってる奴って」

「そんな言い方……好きでそうなってんじゃないだろ。奴とか言うなよ」

「優しいね、あたしは嫌いだよ。面倒くさいし、ムカつくし、邪魔

だし」

「倉田さん！」

怒鳴れば倉田さんは大人しくなる。

“性格に難あり”は本当にその通りだと思った。憧れてた子の口から、こんな酷い言葉を聞くなんて。

怒鳴ってしまつて更に気まづくなった空気に思わず舌打ちをしてしまふ。

そんな俺に倉田さんはまた笑う。

「ね、あたしあんたになら色々話せる気がするんだよ」

「話せる？」

「相談できないんだよ。自分の事、誰にも。同じ悩みを持つてる奴じゃないと」

それはこつちだつて同じだ。

家の中で母さんの相談はタブーになつてゐるし、雅氏にそんな重い話もしたくない。不満は俺が中に吸収して、自然と代謝されるのを待つしかなかった。

でも相談相手がいたら、排泄が出来たら確かに気分は楽になるだろう。

倉田さんの言葉に魅力を感じた俺は自然と頷いていた。その反応を見て、倉田さんが笑う。

「じゃあ話そ。どうせ授業ももう始まつてるし、あんた入れないっしょ？」

「誰のせいだよ」

「細かい事言わないの。まずはあんたからね」

倉田さんに促されて、胸の内を吐きだした。

お袋が精神病になって悲しい、家の中が変わってしまった、太陽の様だったお袋が見る影も無くなってる、今までの生活に戻りたい、お袋との会話が見つからない。

胸の内を吐きだしてると自然と目に涙がたまる。

グスツと鼻を鳴らした俺に、倉田さんはティッシュを投げつけた。

それで涙を拭いて全て話すと幾分かスッキリしたように思えた。倉田さんは難しい顔をしてる。

「難しいよね。そういうの……相手の心が読めたらいいのに」

「それ思うよ。心理状態マニユアル本が欲しいよな」

「欲しい欲しい！そしたらあたしも……」

「倉田さん？次はそっちの番だぜ」

倉田さんに話すように促すと、倉田さんはまず最初に“気味悪がらない事”と釘を打ってきた。
似た者同士なのに今更それもないだろう。そう返せば安心したように笑った。

「倉田幸は幼いころに父親に虐待を受けてた。身体的なものも精神的なものも性的なものも」

「……」

「母親は気付いてくれなかった。倉田幸が泣きついててもね。そして父親の虐待の恐怖から逃れる為に、倉田幸にもう1つの人格が生まれた。無意識に父親に会う時はその人格を前に押し出して隠れる事で倉田幸は平穏を得てた。結局父親と母親が離婚して母親に引き取られたから今は交流ないけどね」

「それって……二重人格……？」

震える声で質問すれば頷かれる。

倉田さんの精神病は二重人格だったんだ……じゃあ目の前の倉田さ

んは何者なんだ？
相槌しか打てない俺を気にするそぶりもなく、倉田さんは話を話していく。

「一度出た人格は消えない。無意識に作りだしたから倉田幸はもう片方の人格の存在に気づいてない。だから第2の人格が出る間の記憶がない事に恐怖を抱きだした。記憶が抜け落ちてる自分に……」

「……」
「そして倉田幸は自殺を決意した。飛び降りるね。それを寸前の所であたしが止めたんだよ。それ以来眠ってる」

「じゃあ今の倉田さんは……」

「そう、あたしの方が第2の人格って事。本当の倉田幸は眠ってる。ずっと、何年間も」

眠ってる……何年間も。

じゃあ目の前にいる倉田さんは倉田さんだけど倉田さんじゃないのか？

難しい。これって結論は何なんだろうか。

考えてる俺に倉田さんは寂しそうな視線を送る。

「あんたもあたしが偽物って思う？ 倉田幸の偽物」

「え？」

「あたしは第2の人格、本人格じゃない。母親はあたしが二重人格だって事ももちろん知ってる。言われたの。偽物が表に出るなって本物を返せって」

その一言は目の前の倉田さん全てを否定するものだ。

一番言ってはいけない一言。精神疾患の人に言っちゃいけない言葉
ワースト1だ。

必要とされていないと言うのは。

それを……実の母親に言われたんだ。倉田さんのショックは半端じゃないだろう。

「あたしはもう1人の倉田幸。演技なんかじゃない。本当にもう1人の自我。だけど母親はそれを分かってくれない。全てを逃げだして自殺しようとした卑怯者が本物って言うんだよ。あたしは偽物の一言で片づけられる。今は言われる事はないけど、きっとそう思われてる」

「……俺は今の倉田さんしか知らない。だから今の倉田さんが倉田さんとは思えない」

「そう」

「俺のお袋はさ、うつになってから自分が必要じゃないと思われる事に以上に怯えてる。役に立たないって……」

「……」

「でも役に立たない人間なんている訳ないし、ましてや家族を……あたしは言われた」

倉田さんに言葉を遮られて顔を上げる。

倉田さんの顔は悲しそうに歪んでる。

「それは本物の人格だからだよ。あたしは後から生まれた人格、母親のお腹から生まれた訳じゃない。倉田幸の精神がアメーバみたいに分裂してあたしが生まれたんだ。だから母親は自分の子供じゃないと言ってあたしを嫌う」

「じゃあ友達でも作ればいいだろ。そしたら必要としてくれる人が出来る。何で友達を避けるの？」

「倉田幸を起こさない為だよ。こいつは極度の対人恐怖症だから。起きたら泣き喚きます。あたしなんか抑えられる存在じゃない。だから眠らせとくんた。ずっと静かに」

忌々しそくに語る倉田さんは本当にもう1人の倉田さんが嫌いなんだと確認した。

本物の倉田さんは眠ってる。何年間も表に出ないまま。とんでもない秘密を知ってしまった。俺が抱えてる悩みよりもはるかに大きい悩み。

一目ぼれして憧れてたマドンナは二重人格だった。

互いを知った金曜日、

不思議と彼女に対する想いが増した気がした。

3 やっぱり君が好きなようだ

結局5限目の授業はさぼって屋上で過ごしてしまった。

倉田さんとの会話は決して明るい会話ではなかったけど、中々為になったと思う。

相談できる人がいるって、こんなに心強いんだな。

3 やっぱり君が好きなようだ

学校が終わって真っ直ぐ帰路につく。

今日はバイトの無い日だし、帰って少し寝てから飯でも作るかな。バイトがないから何だか少しだけ足が軽い気がする。

「いーちのせ」

「あれ、倉田さん」

俺を呼ぶ声が聞こえて振り返ると、倉田さんが手を振りながら歩いてきた。

倉田さんってこっちの方向だったのか。

そのまま倉田さんと軽く話しながら家に帰る事になった。

正直言ってかなり舞い上がってる。まさか片思いしてた時はこんな日が来ると思ってたから。

倉田さんは少し砕けた感じになってて、見たいテレビなどを嬉しそうに語ってる。

やっぱこうやって見ると倉田さんはマドンナと言われるだけあって本当に可愛い。惚れた弱みではないが純粹にそう思う。

まあふられた俺が今更あーだこーだ言うのもあれなんだけどね……

「一之瀬、今日はおばさんの迎えに行くの？」

「いやーあれは時々だから。いつもは親父が仕事帰りに迎えに行くんだよ。それにお袋が病院行くのは大体朝だから、こないだは特殊なケース」

「ふーん……」

倉田さんは適当な相槌を打って再び自分の会話をし出す。

雑誌で可愛い服を見つけたとか、飼ってる犬が可愛いとか。

そんな話を話す事、十数分。分かれ道で俺と倉田さんは手を振って別れた。

「ただいま」

家に帰って靴を脱いでリビングに向かう。お袋は相変わらず自分の部屋にこもってる。

今までなら何も言わずに自分の部屋に向かうんだけど、俺はお袋の部屋に行って「ただいま」と言った。

お袋は少し驚きながらも「おかえり」と返事をしてくれた。

そのままベッドに横になると自然と眠たくなってくる。

いくら寝ても足りない。こんなに寝るっけ俺。

とりあえず2時間程度は寝れるので、俺はそのまま目を閉じた。

目が覚めた時は6時半で俺は1階に下りて夕飯の支度をした。

作ってる途中で親父が帰ってきて、親父も手伝ってくれたので、比較的早くできたと思う。

お袋を親父が呼びに行ってる間に俺は皿などを並べた。

何か俺、大学生になっても立派に一人暮らしできると思っわ。最近そう感じる。

お袋はちゃんと飯を全部食ってくれた。

その後片付けをして、そのまま倒れ込むようにベッドへ。

眠気はすぐに訪れて、ものの数分で俺はぐうすか寝息を出した。

今週の土、日は特に何もなかった。バイトが入ってる以外は予定もなかったので、比較的良く寝れた。

お袋も病院に行って、親父も休みだからお袋に付き合って行く。やっぱりこう言ったら何だけど、1人は何も考えなくていいから楽だと思った。

倉田さんは何してるのかな？服が欲しいって言ってたから買い物にでも行ってるのかな？

「お前さー結局倉田さんとどうなったんだよ」

次の日、学校に行くといの一番に雅氏に倉田さんの事を聞かれた。目を丸くしてる俺に雅氏は顔を輝かせながら俺の返事を待ってる。

「どうなったって……ふられたじゃん。言わすなし」

「マジか？お前と倉田さんが一緒に帰ってるの見た奴いて、かなり噂になってんぜ」

ああ金曜の……それを見て何かを勘違いした奴がいるらしい。

倉田さんは基本他人と関わらないから、一緒に誰かといえるだけで話題になる。今回は俺が話題になってしまったようだ。

雅氏に違うと言っても、ニヤニヤと笑って信じてくれない。

大体付き合う事になったら言っし。何で振られたとか嘘っかなきゃ

いけないんだよ。

「帰り道あってさ、ちょっと仲良くなったんだよ」

「倉田さん？言いよる奴を片っ端から無視する倉田さん？本当かよ」

「嘘ついてどうすんだよ。マジだマジ。付き合ってねえし、マジで」
「マジか、あーあ……結構俺本気で喜んでただけだなあ」

ごめんな雅氏、ぬか喜びをさせて。

俺の話盗み聞きしてたクラスメートたちは結局デマの噂だと分かったらしく、それぞれが普段の会話に切り替わった。

俺も雅氏と他愛ない会話に変わっていた。

昼休みにその事を倉田さんに伝えると、倉田さんは面倒そうな顔をして溜め息をついた。

あからさまに嫌そうな顔をしたので苦笑いしかできない俺に倉田さんは提案をしてきた。

「そーだ一之瀬、アド教えてよ」

「アド？」

「そうそう。学校であんま話せないからメール」

「それはいいけど」

それはこっちも願ったりだ。

でも倉田さんは何で俺なんかに構うんだろ。ただ単に相談相手程度ならそこまで構わないはずなのに。

アドレスを登録した倉田さんは可愛らしい笑顔を向ける。

倉田さんって実は明るいんだな、と思ったと同時に疑問がわき出た。

「もう1人の倉田さんってどんな子？性格とか」

笑ってた倉田さんの表情が変わる。

あ、もしかして地雷踏んだ？絶対そうだよな。

案の定、倉田さんは不機嫌そうな顔に変わっていく。口も尖っている。

「どうでもいいじゃん。かんけーない」

「ごめん」

「別に、じゃあね」

あ……完全にミスってしまった。

倉田さんがさっさと歩いて行った背中を俺はただ見つめるしかなかった。

その後、結局倉田さんとの会話もなく学校が終わり、俺はバイト先にチャリを走らせていた。

そこで服を着替えて準備をして、開店。

客は結構多かったし、それなりに忙しい。月曜なのにこんだけ多けりや不景気知らずだな。

そんな事を考えながら客のオーダーを受けていく。

店長の先輩達も忙しく動いていて、あれこれ俺に仕事を預けて来る。

俺は若干目が回りながらも、それに1つ1つ答えていった。

「疲れたー」

夜の9時、バイトが終わり背伸びした俺は服を着替えてカバンをあさる。

ケータイを見ると光っていてメールが受信されていた。
相手は倉田さんだった。

その文字に異常に反応して、目を凝らすようにじっと見てしまった。

『今日は何かごめん。少し感じ悪かったなと思って』

短い内容で主語もなかったから一瞬何の事かわからなかったけど、あの事かと思い出した。

すぐさま気にしてないと返信を打ってカバンにケータイをしまう。
心臓がバクバク言ってる。メールなのにすっげー気恥しかったし……

「お、春哉顔あけーよ。誰からメールだ？彼女か？」

「はあ！？違いますよ！」

先輩がからかってくるから必死で訴えたけど、何だか墓穴を掘ってる感じがした。

“彼女”その言葉に反応してしまったもんだから、先輩はニヤニヤしてる。

「いやいや、嘘つくなよ。彼女だろ？」

「俺彼女いませんし」

「そうなん？じゃあ好きな子からのメールか？」

しつこいなと思ったけど、好きな子と言われてまた顔が赤くなる。

やっぱり！と言って笑う先輩は俺の事を茶化してくる。

写真あるか？とか、ラーメン屋連れてこい、とか。

でもそれにちゃんと反応してる余裕はなかった。

ふられたくせに俺はまだ倉田さんの事好きなようだ。
1年の片思いは簡単に諦めれるものじゃないらしい。

恋に気づいた月曜日、
そのきっかけはあまりにも唐突に。

4 探りこっこ

諦めてた熱が再び暖くなる。

それと同時に倉田さんとどう話せばいいか分からなくなった。

4 探りこっこ

どうしよう。あんだけ即答で振られて、まだ好きですとかバレたら
気味悪がられるかな。

倉田さんはそんなつもりじゃなかったはずだ。

同じような境遇でお互い慰め合おうってだけだったんだから。

それなのに調子に乗って嫌われたら今度こそ俺がうつ病になってしま
うかもしれない。

もんもん考えながら授業を受ける。

でも話しなんて全く聞いてない。その証拠に教科書は最初に開いた
ページで止まってる。

後ろからはクラスメートがページ違うぞと言って背中をシャーペン
でつついてるけど、それに返事をしただけで手は動かない。

黒板では先生がすらすらとチョークで公式を書いている。これが終
わったら昼休みか。早く来ないかな……

7月に突入した教室は暑い。

まだクーラーはつけないらしい、蒸し暑いこの教室で熱心に授業を
受けてる奴はどのくらいいるんだろう？

考え事をして頭を使ってるのに、こんなに暑かったら解決策も浮か
ばない。

俺はちゃんと相談係として勤めを果たせるのか。

倉田さんを満足させられてるんだろうか？ 倉田さんは俺といて気が楽だと感じてくれてるんだろうか。

気づいたら授業は終了5分前になっていた。

「倉田さん、また告白されたんだってさ」

昼飯を食ってたら、何かを思い出したかのように雅氏が話題を振ってきた。

そっか、また告白されたのかあ。倉田さんって本当にもてるんだな。心臓はドキドキ言ってるけど、頑張ってる表に出さないように「誰から？」と聞くと、その情報も雅氏には回ってたようだ。

「石原だって」

石原って確かサッカー部の奴だよな？ 中々の好青年で顔もいいって噂の……同じクラスになってないからよく知らないが、悪い噂は全く聞いた事がない。

スポーツも出来て、見た目がいいからモてる。それだけしかわからない。

そっか。石原から……倉田さんと並べばかなりお似合いのカップルだろうなあ。

でも倉田さんどうせ断ってんだろうけどなあ。

しかし雅氏の言った言葉は予想外の物だった。

「倉田さん、今回は即答で切らなくて考えさせてくれて言うたらしいぜ。もしかしたらあるのかもな」

「は……」

「まあ石原はイケメンだし、しょうがないか。倉田さんも結局は顔か」

雅氏の言葉はそれ以上聞こえなかった。

倉田さんが考えさせてくれ？それってかなりの事じゃないか？

俺の時なんて3秒くらいですぐに返事をしてきたのに、考えさせてくれて……

意外な展開になぜか石原の友達が言いふらしてるらしい。だから噂が広がってるんだそうだ。

倉田さんに彼氏ができる……じゃあもう俺は用済みなのか？

倉田さんと病院であって、何だかんだでもう3週間が経過した。

もうすぐ期末があって、夏休みがあって……少しだけ夏休みでも会えるかな？とか期待してたけど、そんな事はなさそうだ。

何だか気分が一気に下がって、飯を食う気も無くなってくる。

大体食べ終わってて良かった。俺はそのまま弁当箱を閉まった。

それからまたいつもの日常。

授業を聞いて、けどまたずっと考え事。今度は倉田さんと石原の事。

そればかり考えてたら当たってしまい、少し恥を掻いた。

まったく話なんて聞いてなかったから答えなかった。

「また明日な」

「じゃーな」

学校帰り、雅氏と別れてお袋が通ってる精神科に向かう。今日は夕

方に受診に行ってるから、俺がお迎えって訳だ。

お袋はもう病院が終わって、病院の前で俺を待っていた。
俺が声をかけると、こっちに向かって歩いて来る。

「ごめん、遅くなった」

「大丈夫、さつき終わったばかりだから」

そのまま、お袋のカバンを持って一緒に帰る。少しだけ他愛ない話をして。

医者になんか言われたかと聞けば、お袋はいつもの通りと答える。
でもその表情は少しすっきりしていた。

「春哉、今日はペペロンチーノを食べたいわ」

「あーそっか。作り方調べてみるよ」

「私ができるから大丈夫。だから一緒にスーパーによって帰ろう」

ビックリした。お袋から何かをしようと言ってきた事に。

いつもボーっとしてたのに……少しずつ良くなっていったら
うか？

俺が頷くと、お袋は少しだけ笑みを浮かべた。

スーパーでキノコとかソーセージとか、パスタの麺を買って帰る。

お袋のカバンと俺のカバン、更に重い物袋、少し重いけど何とか耐えて持って帰る。

お袋は自分のカバンを俺から取り上げて肩にかけた。

「俺持つよ」

「そんなに持つてるのに何言ってるの？これくらい大丈夫よ」

お袋は俺に鞆を渡そうとしない。

そのままさつさと歩いて行くお袋の後を俺はついて行った。

「今日ね、同じ病気にかかった人とお話したの」

親父の帰りが遅いから、俺とお袋は先に飯を食って片づけてた。

お袋も一緒に頑張って作って、久しぶりに笑いながらできた気がする。

それを食って、片付けをしているとお袋が今日病院であつた出来事を話してきた。

「母さん、自分自身が嫌いだった。春哉とパパに無理をさせて、自分は何もできないって思ってた。でもその人とお話して心がすごく軽くなった」

「そっか」

「無理せずに頑張ろうと思うの。ちょっとずつ、ちょっとずつやって行こうって」

お袋の言葉が嬉しかった。

色々大変だったんだ。家事の大変さもパートの大変さも、しなきゃいけないって責任感から重くなったって語ってる。

でも申し訳なく思っただけなら止めてほしい。

俺が可哀そうとか、親父に無理させてる。その罪悪感からなら無理しなくていい。

でもお袋は笑った。それは最近ずっと見る事のない物だった。

「だから春哉、母さんとかうやってお話ししながら一緒にご飯作ってくれないかな」

「……そんなの当たり前じゃん」

何だか最近涙もろい。

でも泣いたらお袋に心配かけそうだったから、俺は顔を俯かせて顔を隠した。

そんな俺をお袋はちゃんと見抜いてて、肩に頭を乗せた。

久しぶりに昔の日常が少し戻った気がした。

「昨日、おばさんと歩いてたじゃん。見たよ」

次の日、たまたま登校中に倉田さんに話しかけられて、一緒に登校する。

同じ制服の生徒が俺達に視線を向けてるのが分かる。

そりゃ倉田さんはマドンナだから、それと噂のせいだろう。

倉田さんが保留。今までなかった出来事に誰もが石原と付き合うんだと思ってる。

そんな倉田さんが俺なんかと一緒に登校してるのが不思議でならないんだろう。

他愛ない会話をしながら学校に向かう。もう少し学校までの距離が長かったらいいのに。

そんなしょうもない事を考えながら、倉田さんの話に相槌を打っていく。

「あれ？倉田さんって石原と付き合いだしたんじゃないの？あれ誰？」

「確かあいつ3組の奴だよな。あの噂デマなのか？」

生徒達のヒソヒソ話が俺と倉田さんの耳にも届く。

倉田さんはうんざりしながら、その会話を耳を傾けていた。もうプライベートもくそもないな。マドンナにもなると、行動の一つ一つで生徒たちが騒ぎたてる。

倉田さんにとっては面倒以外の何でもないだろうな。

「マジでウツザ！何であたしの行動がこんなに広がらなきゃいけない訳？」

むすつと不機嫌丸出しの表情になった倉田さんに苦笑いを零せば睨まれる。

でもそれはしょうがない事。

倉田さんは持てるから、学校ではちよつとした有名人だからしょうがない。

「しょうがねえよ、倉田さんと石原が付き合うって噂すっげー広がつてるから」

「は？」

目を丸くしたのは倉田さん。

あれ？倉田さんはこの噂知らないのか？石原と付き合うだろうって奴。

倉田さんが事の詳細を聞いて来たから、俺はそれをちゃんと説明した。すると倉田さんの表情が更に不機嫌そうなものに変わっていく。

「何それ、訳わかんない」

「でも倉田さんは告白をバツサリって言うので有名だから、考えさせてはすごい進歩なんだよ」

「……あんたは嫌じゃないの？」

「え、俺？」

「仮にもあんたあたしに告白してきたじゃん。なのにこんな噂立て嫌と思わないの？」

本音を言った所で何か変わるんだろうか。

何も答えずに固まってる俺に倉田さんの表情がまた変わっていく。

コロコロ変わるんだよな。

不機嫌ながらもどこか怒った様な表情に変わって、倉田さんの足取りは速くなって行く。

「倉田さん」

「うつさい。ばか一之瀬」

そう切り捨てられて、俺はそのまま置いて行かれた。

倉田さんが何でそんな事言うのかが分からない。皆が俺と倉田さんを見て、そのまま視線をずらす。

なんだか完全に振られたみたいないな感じになってるし、俺……少し重くなった足を引きずりながら学校に向かう。

倉田さんは今日返事をするのだろうか。

何だか満更でもなさそうに嬉しそうな顔してたけど。もうやだ。

女々しい自分も嫌だけど、正直に言っただけ嫌われる方がもっと嫌だった。

身体が重たい水曜日、

意中のあの子は誰の物？

5 殺伐ごっこ

あれから倉田さんは俺を見つけても話しかけてくれないし、メールも全く来ない。

どうやら俺はついに倉田さんに嫌われてしまったみたいだ。

5 殺伐ごっこ

倉田さんが俺を置いて行って学校に向かってから一週間ちよい。まったく倉田さんとの会話が無くなった。

だからと言って倉田さんが石原と付き合ったと言っ噂もなく、ただ単に俺が嫌われただけの様だ。

最初は騒いでいたクラスの奴らも流石に一週間なんの変化もなければ皆忘れて、それぞれいつもの話題に戻っている。

その中から外れた様に、いつまでもその事を考える俺はなんて女々しいんだろう。

雅氏もいつものふざけた話題を提供してきて、俺はそれに相槌を打ちながら、ぼんやりと倉田さんの事を考えていた。

結局倉田さんは本当にどうするんだろうな。

あまりにも返事を待たせるのは石原も気分がよくないだろう。嫌なら嫌だと断って、いいならいいで付き合いがいい。

はつきりと二人が付き合いだしたら、俺もきっぱりと諦めれる気がする。

どちらにせよ俺は振られてるんだから、いつまでも倉田さんに恋してるのが間違いだ。

授業開始のチャイムが鳴り、先生が教室に入ってくると生徒達は一

齊に自分の席に着く。

それは俺も例外ではなく、席について教科書を机の上に出した。

「なー今日昼飯屋上で食おうぜ」

雅氏の誘いに乗り、俺達は今日の昼飯は屋上で食う事にした。

屋上か………そういやここで倉田さんと仲良くなったんだよな。今回はケータイ忘れないようにしねえと。

雅氏と他愛ない会話をしながら弁当を平らげていく。

やっぱりもう7月に入ったせいかな、生徒の数はまちまちだ。日なたは生徒はほとんどおらず、日陰に生徒が密集している。

俺達も何とか日陰に場所をとる事が出来たからいいんだけどね。

弁当を食い終わって、くだらない会話をしていれば時間は早く過ぎていく。

いつの間にか後5分で授業開始だったらしく、生徒が皆屋上を出ていく。

俺と雅氏も弁当を片づけて教室に戻ろうとした時、屋上のドアが開いた。

それは紛れもなく倉田さんだった。

倉田さんはそのままフェンスに寄りかかってぼんやりと景色を眺めている。どうやら授業を受ける気はさらさらないようだ。

「あの子マジで変わってんな。変な奴」

雅氏がぼつりと呟いて、屋上を出ていく。

でも俺は縫い付けられたように、その場から足が動かなかった。

「春哉ー？」

「わりの雅氏先行ってて」

「はあ？」

雅氏は首をかしげたが、動く気のない俺を見て「早く来いよ」とだけ告げて階段を下りて行った。

屋上には俺と倉田さん以外の生徒がいなくなり、さっきまでの賑やかな笑い声は全くなかった。

残ったのは少し気まずい空気だけ。

でもなぜか動く事が出来ず、俺は倉田さんの少し離れた場所に腰を下ろした。

倉田さんは腰を下ろした俺をジッと見つめている。

それにいたたまれなくなった俺は軽く笑って、勇気を持って倉田さんに話しかけた。

「迷惑なら出てくけど」

「別に。いいんじゃない？居ても」

「どうも」

それきり無くなった会話。

倉田さんはボーっと景色を眺めている。一体何を考えてるんだろう。

倉田さんにそれ以上話しかける勇気もなく、俺は倉田さんをぼんやりと眺めていた。

やっぱり可愛いよな倉田さんは。横顔も綺麗だ。

変態じみた事を考えている俺に倉田さんが不意に会話を振ってきた。

「一之瀬ってさ……誰かと付き合ったことある？」

意外な質問に目が丸くなった。

倉田さんはいつものハキハキした雰囲気はどこに、モジモジと手を合わせながら少し顔を赤くしている。

あ、石原の返事をするのかな。それと同時に胸がチクリと痛んだ。

でも倉田さんの問いかけを無下にする訳にもいかずに、俺は自分の今までの経験を倉田さんに教えた。

「あるよ。中学の時に2人、長く続かなかったけど」

「どれくらい続いた？」

「1人は半年、もう1人は3カ月。短いっしょ？」

「どこまで行っただ？」

「どこまでって……キスまでは行っただ」

「……そっか」

それきりまた無くなった会話。

倉田さんは溜め息をつきながらフェンスから景色を眺めている。

何で倉田さんはこんな事を聞いてきたんだろう。石原とは全く関係なさそうな質問だけど。

倉田さんを見つめていると、再び倉田さんがポツポツと話を振ってきた。

「石原ってさ……幸が如何にも好きそうな奴なんだよね」

「幸って……もう1人の倉田さん？」

倉田さんは黙って頷く。

一体どうしたって言うんだろうか。

「小学生の時にさ、幸が初めて好きになった奴が石原そっくりだったんだよね。スポーツマンで明るくてクラスの中心で、幸はあいっつという楽しそうだった」

「うん」

「もしかしたらあいつと付き合ったら幸は起きるのかなーって思っただ」

倉田さんの言葉に目が丸くなった。

倉田さんはもう1人の倉田さんを嫌ってたはずなのに、急にどうしたんだろうか。

何も言えない俺に、倉田さんはまた言葉を続けていく。

「そしたら速攻で断る事が出来なかったんだよね。気づいたらいつまでもズルズル引き延ばして期待させて……最低な奴だね。あたし」
「倉田さんは……石原が好きじゃないのか？」

「わからない。付き合ってみたら好きになるかもね。告白されてから話すようになったけど、いい奴だと思う」

「だったら……」でも向こうがあたしを受け入れてくれないと思う」

受け入れてくれない？石原が倉田さんを？

そんな事はないと思う。石原はいい奴だって雅氏が言ってた。

俺は話した事がないから分からないけど、倉田さんとの噂を聞いて石原に視線が行くようになって、見ている限り石原の周りは笑いに溢れている。

その中心にいるのは石原で、見ているだけでいい人って感じだった。そんな石原に倉田さんは何が不満なんだろう。

少なくとも俺よりも格好いいし、運動できるし、いい所をいっぱい持つてる気がする。

「受け入れてくれないって……向こうが好きだから告白してきたんだろ？」

「……二重人格だって知ったら気味悪がられそうじゃん」

「それは……」

「中学生の頃、初めて好きな人が出来て付き合った事があったんだよね。でも二重人格だって事を言った途端ふられた。次の日にはクラス中に気味悪がられた。それ以来かな、誰とも付き合いたくないって思っただの」

倉田さんはそれがトラウマになってるんだ。
それは仕方がない事だと思う。そんな事が起これば誰だってトラウマになってしまいそうだ。

倉田さんは顔を俯かせ少し泣きそうだ。

そんな倉田さんを励ます事が出来ない自分が情けない。

「倉田さんは付き合いたいんじゃないのか？石原と……」

「わからない。今は別に好きじゃないから……」

「早く返事しねえと可哀そうだよ。石原もドキドキしてんだからさ」
「わかってるよ」

そのまま無くなってしまった会話。

もどかしくて息苦しい。もうこのまま目を瞑って眠ってしまいたい。

「一之瀬」

「何？」

「……何でもない」

倉田さんが何かを言いかけて、言うのを止める。

でもそれを咎めることなく、俺はその場に横になった。

「石原」

「んー？」

「倉田さんさー、3組の一之瀬と出来てるって噂らしーぜ」

「は？」

「あり得なくね？マジうぜーよな」

俺は何も分からなかった。

倉田さんの気持ちも、石原の気持ちも、今の自分の状況も。
やっぱり自分の気持ちに嘘つくとロクな事がないと言う事だけこれ
から理解する。

自分に嘘つく木曜日、

それは君の為？それとも自分の為？

6 誰が悪いかわからない

何だかとてもない事に巻き込まれたみたいだ。

雅氏は俺の肩をポンポンと慰めるように叩いてる。

クラスの奴らは俺の事を信じてくれてるみたいだけど、石原の周りからしたら俺は倉田さんを盗った奴だと認識されてしまったらしい。

6 誰が悪いかわからない

「マジでただの友達なのにー俺振られたのにー」

机にそう突っ伏して豪語すれば、皆分かってるよと言う視線を向けて来る。

どれだけ石原の友達に陰口を叩かれたか。完全に俺は悪者扱いじゃないか。倉田さんと友達でいることすらいけないって言うのか？

流石に頭にきて睨みつければ睨み返される。これじゃ堂々巡りだ。今更ながらに倉田さんがどれだけ学校で影響力のある子かを認識させられた。学年のマドンナに一般人は近づく事も出来ない。そう言いたいのかよ。

「倉田さんってマジですごい奴なんだなーマジでどこのアイドルだよ」

雅氏の言うとおりだ。

どれだけ倉田さんの扱いはすごいんだ。

一緒にいるだけで付き合ってるって噂が立って、考えさせてくれって言われたら噂が立って、友達だったら盗ったなんて噂を立てられ

て……倉田さんにプライベートはないのかよ。

こんな生活が続けば、倉田さんもしんどいと思うようになるんだろうな。

ぼんやり雅氏の話を聞きながら帰る用意をする。

後は担任のHRが終われば学校も終わりだ。ラーメン屋に行かなきゃな。

今日は金曜だから客の入りも多いだろうし、忙しそうだ。

いそいそと帰る準備をしていると担任が教室に入ってきて、HRが始まった。

HRが終わってバイトに行く為にチャリ置き場に向かう。

その間に石原のクラスを通らなきゃいけないくて、皆からの視線が痛い。

石原は5組の中心人物だ。そんな奴に喧嘩をうった男になってしまっている。

「気にすることないよ。大体高校生にもなってガキかよ」

同じチャリ通の奴がこっちに視線を向けている奴らに舌打ちをする。その瞬間に火花が散った気がする。

もうクラス同士の抗争みたいになってんじゃん。やめてそいうの。俺は5組を睨んでる奴の腕を引っ張って、チャリ置き場に向かった。そのままそいつと手を振って別れて、チャリに跨ってペダルを踏む。暑いなあ……7月でこの暑さだから8月が思いやられる。

ラーメン屋の厨房はもっと暑い。今日も汗だくだなこりゃ。

「はい！チャーシュー1丁！」

先輩にお盆を渡されて、それを客の所まで持って行く。
そこで客のオーダーを聞いて、席を案内して、水を出して、皿洗いをして……目が回りそうだ。

俺のバイト時間もあと1時間で終わり。さつさと時間が過ぎてく
ないかな？

まあ暇よりも忙しい方がいいんだけどね。

ラーメン屋のドアが開いて、また新しい客が入ってきたので、俺は
そっちに向かった。

「ただいま帰りましたーっ」と

バイトも終わり、21時に家に帰りつく。

そのまま1人ごち、俺はリビングに向かっていく。
リビングには親父が帰っていて、新聞を読んでいた。

「おお春哉お帰り。飯は作ってるぞ」

「あ、ただいま。さんきゅー。親父、おふくろは？」

「自分の部屋にいるよ。のんびりしてるさ」

手を洗って、まだ温かい皿に手をつける。

そのまま黙々と飯を食っていけば、親父が新聞を読むのを止めてこ
っちを見ていた。

「何だよ」

「いや、何だかお前がしつかりしていつてるなと思ってな」

そのまま親父は子どもにやる様に俺の頭をグシャグシャ撫でる。

「ちょ、止めろつて！飯食えねえだろ！」

「春哉、今日は俺と風呂入るか？」

「嫌に決まってるんだろ！親父と入ったら狭いっつーの！」

親父は笑いながら暫く俺の頭を撫でまわした。

何だかこんな事自体久しぶりで、何て反応したらいいかわからなかったけど、でも少しだけ嬉しかった。

こんなことされる事なんてもう無かったから。

気恥しかったり嬉しかったりで良くわからない。でも嫌ではない、それだけは分かった。

学校はやっぱ昨日と同じ。

5組の奴は俺を見るたびにヒソヒソ話。もう本当にうざい。完全な勘違いじゃないか。なんで俺がこんな噂の的にならなきゃいけないんだ！

昼休みも購買に行けば5組の奴らの視線は俺に向く。お前ら俺見る暇があるんならパンの1つでも買いやがれ。

心の中でそう呟いていると不意に肩に誰かがぶつかった。

「うおっ」

「あ、わりい！大丈夫か？」

大丈夫。そう言いかけた時、俺は目を丸くした。

それは向こうも同じだったようで、向こうも俺だと気づいて少し気まずそうに視線をずらした。

それもそうだろう。ぶつかった相手は石原だったから。

石原は視線を逸らしながらもう一度ごめんと謝って輪の中に入っていた。

こんな事ってあるんだな。マジでどんなタイミングだよ……
呆気にとられている間に欲しかったパンは売り切れてしまい、仕方がないから余ったパンを買って教室に戻った。

その後はまた同じ。雅氏と弁当食ってクラスの奴らと騒いで、同じだったんだ。

でも便所に行っている途中で女子の会話が耳に入った。

「倉田ってさー石原君にまだ返事してないんだって」

「えーもう2週間くらい待たせてない？石原君可哀そう」

「大体調子乗りすぎだよ倉田。マジむかつくんだけど」

倉田さん、まだ返事してないのか。2週間近くも待ったら俺だったら発狂しそうだ。

でもそれは仕方がないように思える。

倉田さんにとって付き合うつて行為はとても怖いものだから。

この間の話を聞いて、倉田さんがただ闇雲に返事をしないんじゃないって事は分かった。

ただ怖いんだ。嫌われる事が、自分を偽る事が。それだけなのに……何も分らない奴らは好き勝手に自分の考えを現実のものの様に語る。

それが少しもどかしくて腹が立つ。

本当の事を知ればこういう奴らはそれはそれで面白がって話題にする。

何も語らなければ、勝手な想像をされてその考えが公式なものにされる。

何をしたらって変わらないじゃないか……

「一之瀬、何トイレの前で固まってんの？」

「おわ！倉田さん！」

いきなり倉田さんの顔がアップになって思わずのけぞってしまった。そんな俺を見て、倉田さんはカラカラ笑ってる。

「トイレ行かないの？そんなとこで固まってて変態くさい」
「へ、変態！？」

俺そんな風に見えてた訳！？超ショックなんだけど！

まあ確かに便所の前でずっと立ち止まってる男子がいたら俺でも何してんだ？って思ってしまうよな。あー恥ずかしいな。

気恥しさに頭を掻けば、倉田さんはまた笑ってる。

そのまま倉田さんと軽く話していれば、ふと視線を感じた。

俺の視線の先には石原の姿。石原は俺を見た後すぐに顔を逸らして教室に入っていつてしまった。

石原が気になって、その後の俺は倉田さんとの話に集中できなかった。

「あー今日もバイトだ」

人のいない教室で独りごちる。

運が悪い事に担任と進路の事で呼び出されて時間を食ってしまった。理由は簡単。学校は俺がバイトをしてるのを知ってる。家庭の事情と言う事で許可を貰ったから。

だから進学するのか就職するのか早く決めろと言うことだった。就職組は早めに就職することを決めないと、就職先をもうすぐ色々探し出すんだそうだ。

その話が長引いて、気づけばもう30分でバイトに着かないとやば

い。

急いで荷物を詰めて、俺は教室の電気を消して教室を出た。

廊下を走っているところ組の教室からサッカーのユニホームを着た男子が出てきた。

それは紛れもなく石原で、俺は気まずさから思わず立ち止まってしまった。

立ち止まったせいで石原も俺に気づき顔を上げる。

そのまま気まずい空気が流れ、俺は咄嗟に走りだそうと顔を背けた時、石原がこっちに向かって歩いてきた。

「なあ、お前さ一之瀬だろ？倉田さんと付き合ってるってマジ？」

「え、何でそんな……そんなのデマに決まってんじゃない」

急に話しかけられ焦った俺を余所に石原は顔を顰める。

「その噂はデマかもしれないけど、お前好きなんだろ」

「好き？」

その言葉で頭が真っ白になり、体が硬直した。

精いっぱい隠してた行動でも石原から見たら丸わかりだったようだ。石原は悔しそうな、怒ったような目で俺を睨みつけている。

そりゃそうだろうな。石原からしたら自分が告白して返事を待ってる間に違う男が好きな子にちょっかいをかけてると言った感じだろう。

二人の邪魔したらいけない。それに俺はもう振られてるんだし。

そう思っ、慌てて首を横に振った俺に石原は更に苛ついたような表情を浮かべた。

「嘘つくなよ。だって倉田さんがあんなに話しかけるのお前しかい

ねえもん。別にいいんだぜ隠さなくても。どうせ俺は振られるんだし」

「そんな訳じゃ……俺はただの友達で……」

「だってお前告ったんだろ？倉田さんに」

こんなところで墓穴を掘るなんて思わなかった。ってか何で石原が知ってるんだ？

色々気になる事が多すぎて何を真っ先に考えていいかが分からない。そのまま黙っている俺に石原は声を荒げた。

「認めろよ！好きなんだろ！だから邪魔すんだろ！？」

「別に邪魔なんかしてねえしっ……」

「邪魔だよ！お前は邪魔だ！マジでム力つくよ！」

石原の言葉に軽く放心してしまった。

そのまま石原は踵を返して、俺に背中を向けて走って行ってしまった。

あーあ邪魔かあ……何となくわかってたんだけどね。

俺と倉田さんが話してるのを石原がどんな表情で見てたかなんてわかってた。焦った様な、悔しそうな表情で見てたはずだ。

それに何となく気付いてて倉田さんに何も言わなかった俺はどうなんだろう。それが悪い事なんだろうか？

何も分からない。

倉田さんの友達と言うポジションを確保し続ける俺が悪いんだろうか？それとも未だにはつきり意思を示さない倉田さんが悪いんだろうか？それとも八つ当たりをしてきた石原が悪いんだろうか？

誰が悪いかなんてわからない。

俺はただ倉田さんの友達だし、倉田さんはまだ考えてる途中だし、

石原は今の状況を焦ってる。

それぞれ考えがあるんだ。それがぐちゃぐちゃになってしまっただけなんだ。

深呼吸して、バイトに向かう為にチャリ置き場まで向かう。

学校が嫌になりそうだ。だれかこの泥沼から救ってくれ。

俺はとんでもない子に惚れてしまったようだ。

君に焦がれる火曜日、

恋と言うのは人格を変えてしまうようだ。

7 混乱

あの後ラーメン屋でも集中できなくてオーダーを間違えたりして店長に怒られた。

でもその説教すらまともに聞き入れる余裕すら俺には無かった。

7 混乱

家に帰ってぼんやりとベッドに横になって考える。

石原は相当焦ってたんだよな。それもそうか、もう2週間だもんな。

倉田さんも早く返事をしてあげればいいのに。でも駄目か、倉田さんは真剣に考えてるんだ。

でも何で倉田さんは今更もう1つの人格の事を話題に出したんだろう。う。

ずっと眠らせとく。そう言ってたのに……石原と付き合いえばもう1人の幸が起きるかとか言ってたな。それってどういう事なんだろう。う。

ごろんと寝がえりを打って考えても答えは出てこない。

それもそうだ。俺は倉田さんでも石原でもないんだから、2人の深層心理が分かる訳もない。

結局俺は被害者なのか加害者なのかどっちなんだろう。

確かに倉田さんとはただの友達だ。それ以外の何でもない。でも本当に何の下心もナシでって言われると答えはNOだ。

だって俺は倉田さんが好きだから。まだ諦めれなくてズルズル情けなく引きずってるから。

俺はもしかしたら倉田さんと距離を置いた方がいいのかな？

石原は確実にそれを望んでるし、そうした方がきつといいって事も分かる気がする。

でも自分自身がそれでいいかって言われたらきつとそうじゃない。誰かが譲らないと解決が出来ないんだな。

時計の針が23時を指す。

明日も学校だし早く寝なきゃな。あ、やべ。課題やってねえし。しようがねえな、写させてもらおうつと。

次の日の朝、いつもより少しだけ早く学校に行って宿題を写す。できるだけ早く手を動かしていたら案外宿題は10分で写し終わった。

20分も早く学校に来たんだけど逆に時間が余ってしまった。仕方ないから、そのままクラスメートとくだらない会話に花を咲かす。

昨日のお笑いがどうだったとか、先生に怒られてム力つくとか、今週号のジャンプが凄かったとか、何でも無い会話だけど楽しくて時間はあつという間に過ぎていく。

気づいたらあと5分でHRが始まる時間になっていて、少なかった生徒も大部分がそろっていた。

「そろそろ席戻るかな。宿題さんきゅーな」

「おー。間違っても文句言っなよ」

「いわねーよ」

軽くお互い笑いあつて席に着く。

その後ちようど5分後に担任が入ってきて、いつもと同じHRが始まる。

それを欠伸をしながら何となく聞き流していく。

早くHR終わんねえかな？ってか学校終わんねえかな？あ、でも今日バイトがあるから学校終わってもものんびり出来る訳じゃないんだけど。

でもそれでも学校に拘束されるよりはマシだ。少なくとも石原と倉田さんの間に挟まれること無いし。

やっぱ直接あんな事を言われると苦手意識っつーのが出来てしまつて、できれば石原には、石原だけじゃない5組には近づきたくない。あーでも5組には購買行く時絶対通らないといけないから面倒くさいなあ。

また睨まれちゃうじゃん。

憂鬱な気分のまま授業がスタートした。

「なあ春哉、お前購買だろ。飯買いにいかね？」

昼休み、クラスメートの奴らが教室を出る際、俺に声をかけた。

雅氏は今日コンビニで買ってきたらしい。くそ、俺もそうすれば良かった。

仕方ないのでクラスメートの奴らと購買に向かう。

相変わらず購買に向かう前に5組の前を通らなきゃいけない。

そしてそいつらが俺を見る視線は同じ。倉田さんにちよっかいを出す最低な奴。

流石にこれが2週間続けば精神的に参る。

石原に言いたい放題言われたのも相まって苛立ちはどんどん募っていく。

大体俺が何をしたって言うんだ。俺はただの友達で、倉田さんが石原に返事をしないだけなのに何で俺が悪いみたいになつてんだよ。

心の中でそう呟いて購買に向かう。

購買は相変わらず生徒がごった返しになってて、この中から好きな物を買うのはかなり大変そうだ。

俺とクラスメートは揉みくちやにされながらも、何とか買いたい物をゲットして教室に戻る。

その時、一緒に歩いてたクラスメートは友達を見つけたらしく手を振った。

「あ、うーす。お前も購買？」

「ああ、もう結構売り切れてる？」

「焼きそばパンは完売してた」

「えーマジで！？これだから4限目に南ババアの授業は嫌なんだよ」

「あの先生、授業開始5分前に来て、授業終了5分後に終わるからな」

「マジであいつが4限に来た時、ぜってー購買でいいもん売り切れてっからな。マジいい加減にしるババアって感じだぜ」

2人は楽しそうに話してるけど、正直俺はその中に入れない。

だってそいつは5組の奴だったから。

そいつはクラスメートから俺に視線を寄こしてくる。少しだけ緊張してしまった俺に、そいつは軽く笑った。

「そんなに警戒すんなよ。色んな噂流れてっけど、こいつから話は聞いているからさ。お前もついてねえよな。倉田が石原に未だに返事しないせいで迷惑かぶってんだろ」

意外だ。そう思ってる奴もいたんだな5組に。

「倉田も付き合う気が無いなら石原さっさと振ればいいのによ。待

たすのも可哀そうだよなー」

「……」

そいつはそのまま手を振って購買に向かって行ってしまった。

やっぱり俺は被害者なのかな？倉田さんがいつまでも返事をしないから、石原がいつまでも焦るから、だからこんな事になってるのに。段々苛々してきて、俺は小さく舌打ちをした。

学校も終わり、皆が教室を出ていく。

バイトまで少し時間があつた俺は20分程度教室に残ってバイトに行く準備をした。

「じゃーな、また明日」

「おう」

友達に軽く手を振って教室を出ると、たった20分しか経ってないのに廊下の人はかなり少なくなっていた。

その中を1人で歩いていると後ろから声がかかった。

「一之瀬」

その声は今一番聞きたくて聞きたくない物だった。

倉田さんは何も分かってないように笑って俺の横に歩いてきた。

「一之瀬帰るの？あたしも帰るんだ。一緒帰ろうよ」

「俺はバイトだよ」

「途中まで一緒だったらいいいじゃん」

ニコニコしてる倉田さんに苛立ちが募っていく。

俺がこんなに悩んでるのに倉田さんは何ニコニコしてんだよ。倉田さんがさっさと返事さえすれば俺はこんな目に遭わなかったのに。そう思ったら倉田さんに言いたくて堪らなくなった。

「まだ返事してないんだって？石原に」

「え……まあ」

倉田さんが気まずそうに頬を掻く。

まだ悩んでるのか、どんだけ人を焦らせたなら気が済むって言うんだよ。

「早く石原に返事しろよ。石原可哀想だろ」

「……一之瀬に関係ない」

ムツとして倉田さんの機嫌が悪くなる。

でもそれ以上に俺の機嫌の方が悪くなった。

関係無い？どの口がそう言ってたんだ。俺は石原にキレられてんだぞ。5組の奴らに陰口言われてんだぞ。なのに関係無い？

ふざけるなよ！

「関係無くないし。俺は5組の奴に嫌われてるんだよ」

「は、何で？」

「いつまで経っても倉田さんが石原に返事をしないから、倉田さんと仲がいい俺が倉田さんを盗ったんだってさ」

「はあ？何それアホくさい」

「確かにアホくさいけど、実際陰口言われりゃ頭にくるよ。倉田さんはいつまで経っても返事しないしさ」

「……それは」

「それはじゃないだろ。倉田さんがはっきりさせないのが悪いんだろ？迷惑なんだよ」

そう言い終えた後、ハツとした。

倉田さんの目が丸くなって、その場に立ち尽くしている。

あ、今何て言った？俺酷い事言ったんじゃないのか？

罪悪感だけが募り、謝ろうにも謝れない。その場から逃げ出したくてたまらない。

でも悪いのは倉田さんだ。倉田さんがいつまでも石原に返事をしないから、俺にかまってくるから。

だから俺と噂を立てられて、俺が石原に切られたんだ。

全部の責任は倉田さんにあるんだ。倉田さんがはっきりしないから！石原と付き合うならさっさと付き合えばいい。石原だって流石に2週間も返事を待たされたら切れたくもなるだろう。

俺はその場の気まずさから謝る事もせずに、その場から逃げてしまった。

倉田さんの声は聞こえない。もしかしたら怒ってるのかもしれない。気の強い倉田さんの事だ。俺の事うざい奴って思ってるに違いない。あーあ、マジで嫌われた。

大体お門違いだったんだ。

俺がマドンナに恋した自体が。俺には高根の花だったんだ。なのにただ単に相談ができるから仲良くなっただけ、倉田さんは何も考えてなかったんだろう。

それを俺が調子に乗っていいように考えたからそうだったんだ。

ラーメン屋までの道のりを必死でチャリを飛ばす。

何も考えたくない。胸がキリキリ痛んで、訳もなく大声を出して暴れたくなった。

でもそんな事が出来ない事を俺は知ってる。

少しずつ、上手く自分で代謝するしか解決策がないって事も分かってる。

でも泣き叫びたい。暴れたい。何でもいいから大声を出したい。言いたい、倉田さんにもう一度、好きだったって。

視界が滲んで、周りの景色が何重にも見える。

彼女に振られた時だってこんな事なかったのに、俺はどれだけ倉田さんの事が好きだったんだろう。

初めてだったんだ。一目ぼれしたのなんて。

見ただけで顔に熱が集中したのなんて、話してみたくて堪らなかったなんて……全部初めてだったんだ。

涙にぬれる木曜日、

俺の恋はきつと叶わない。

8 君の結論

“話したい事があるから、放課後教室残ってもらっていい？”

倉田さんからそんな内容のメールが授業中に来た。

そのメールを見た瞬間、心臓がヤバいくらい跳ね上がった。

8 君の結論

その後の授業は集中できなかった。

もうすぐ期末テストだったから、先生が特に大事だと言った場所をクラスメートたちは真剣に写している。

そんな中、俺はボケーっと手を動かす事も無く話を聞いている。

時間は刻一刻と過ぎていき、このまま放課後になっていく。嫌だと思っても時間は止まらないし待つてもくれない。

ただ憂鬱な気持ちを引きずって放課後になるのを待った。

「じゃあ春哉また明日」

「じゃあな」

雅氏やクラスメートの奴らに手を振って椅子に腰かけケータイをいじる。

HRが終わって放課後になり、教室に生徒はどんどん無くなっていく。

最初はクラスの奴らと話してたけど15分も待てば数人程度しか残っていない。

倉田さんから来たメールに書かれてた通り、俺は放課後教室で1人ぼんやりしていた。皆はもう帰ってしまった。

でも倉田さんが待っててって言うから仕方なく俺は教室で待機している。

バイトが今日は無いから時間は特に気にしないけど、あんまり学校に残るのもあれだ。

お袋が確か病院に行つてて親父が連れて帰るから、6時30くらいまでには家に帰りたい。

現在の時刻は5時35分。かれこれ20分は待ってる事になる。

向こうはまだHR終わんないのか？これ以上遅くなるんなら俺ももう帰りたいんだけど。

それに正直あまり乗り気じゃない、倉田さんに会うのは。

こないだあれだけブチ切れておいて今更どの面下げて会えるって言うんだ。

倉田さんはあの後どうしたのかな？メールの文面だけじゃ全ては分からない。

怒ってるのかな？だとしたら今日俺を呼びだして文句をつける気にいるのかもしれない。

それならそれでもしょうがない。急に切れた俺が悪いんだから。

そう思つてケータイをいじっていると教室のドアが小さく音を立てた。

顔を向けるとそこには気まずそうに教室に入ってくる倉田さんの姿があった。

倉田さんは黙って俺に近づいて来る。

「……ごめん、遅くなって」

「あ、いや平気だけど」

それきり無くなった会話。

倉田さんは口をモゴモゴ動かして何かを放そうとしているみたいだが上手くいかないらしく、つかえてばかりだ。

そんな倉田さんの姿を珍しいなと思いつつも俺は根気よく待った。するとゆっくりだが倉田さんが話した。

「さっき、さ……石原に返事してきたんだよね」

「へえ……そう」

返事。それが分からないほど俺は馬鹿じゃない。

思わずぶつきらばうな返事になってしまったのを反省した。倉田さんの肩が軽く跳ねたから。

倉田さんは視線をせわしく移動させ、俺を見ないようにしてる。何でそんな事を俺に報告してくんだよ。

「あ、あのさ、結局付き合わなかったんだ。友達としてはいい奴だけど、恋愛的にはやっぱり好きになれなくてさ……」

「え？」

今度は目が丸くなった。

石原を振った？ てつきり付き合うつて報告をするんだと思ってた。茫然としてる俺に倉田さんは少しづつ俺に視線を合わせていく。

顔を真っ赤にさせてるけど視線だけは逸らさない。逆に俺が今度は視線を逸らしそうになった。

次にくる言葉が分からない。聴きたくないけど気になってしょうがない。

教室が真っ赤に照らされてるお陰で顔が真っ赤なのはお互い夕日のせいにできそうだ。

心臓があり得ないほど早く鼓動を打っている。それと同時にキリキリと締め上げられる感覚がして息を飲んだ。

そして倉田さんは少しだけ泣きそうな顔をした。

「今更言える立場じゃないけど、さ……石原は多分もう一之瀬にキレたりしないと思うからさ、もう怒らないでよ」

「……」

「こ、今度はちゃんとハッキリするから怒らないでよ……」

グスグス泣き始めた倉田さんに心臓が再び痛いくらいキリキリ音を立てた。

そんな顔をさせたい訳じゃないのに。

どうやら俺が放った言葉は予想以上に倉田さんを傷つけてたみたいだ。

思い切り椅子から立ち上がった俺に倉田さんは目を丸くする。

「ごめん！そんなんじゃない……なくて……俺も調子に乗ってたんだ」

「一之瀬？」

「倉田さんが話しかける男子は俺しかいないって調子乗ってた。自分が特別なんだって優越感に浸ってた。だから石原と仲良くなってく倉田さんに苛々した」

「……」

「ごめん、俺最低だよ」

頭を下げれば倉田さんが首を振るのが一瞬見えた。

再び顔を上げた先には相変わらず泣いたままの倉田さん。

「あ、あたし初めてだったよ。家族以外にキレられて悲しくなったの……」

「うん……」

「でも悪いのはあたしで、一之瀬はもうあたしの事嫌いになったん

だなんて思ってた……」

それ以上言っただけでなく、俺は無意識に倉田さんに手を伸ばしていた。

抱きこんだ体はちっちゃくてか細い。

そのままギュウギュウ抱きしめれば倉田さんが俺の腕の中でモゾツと動いた。

見上げて来る腫れた目が俺を映し出す。

ああどうしよう。もうここまで来て誤魔化すなんてできないようだ。

「ごめん倉田さん、俺まだ倉田さんの事好きだ」

倉田さんの瞳が大きくなる。

でも今度は目を逸らさなかった。

「嫌なら突き飛ばしてくれればいい。ごめん、友達って言ってたのに結局俺はこんな奴だったんだよ」

その時、倉田さんがゆっくりと俺の背中に腕をまわした。

その間隔に驚いている間に倉田さんは顔を俺の肩口に隠してしまった。

お互いの心臓が痛いくらいに音を打っている。

このまま拍動数が上がれば死んじゃうんじゃないかってくらい忙しく活動してる。

そして倉田さんがぼつりと呟いた。

「い、一之瀬がいいって言うなら、あたしと……っ、付き合って下さ……い」

願ってもない言葉だった。

更に力を入れて抱きしめれば倉田さんが苦しそうに身を振る。

でもごめん。こうでもしなきゃ喜びを現せれないんだ。

かろうじて絞りだした「お願いします」それだけ言っただけ俺は倉田さんを抱きしめ続ける。

時計の針は6時を指している。

早く帰らないと行けないんだけど、まだ家には帰りたくなかった。

現実だと言う事を確認するように、ただただ倉田さんを抱きしめ続けた。

願いが叶った金曜日、

顔を赤くしてる彼女がどうしようもなく愛しい。

9 名前を呼んで！

俺と倉田さんが付き合いだしたのは誰にも言っていない。

倉田さんが石原に言ったただけだった。

石原はいい奴だった。顔を合わせた俺に少し気まずそうにしながらも「おはよう」と挨拶してくれたから。

今日から新しい学校生活が始まる。

9 名前を呼んで！

「なんだよ春哉、ニヤニヤして気持ちわりいな」

もうすぐ期末が始まる事で、俺は今までポケッとして取っっていなかったノートを雅氏に見せてもらっていた。

雅氏はニヤニヤしながらノートをとる俺に気味が悪そうな視線を送っている。

でもしょうがないだろ。

1年間片思いし続けていた子と両想いになれたんだ。こんな嬉しい事は無いだろう。

笑って返事をしない俺に、雅氏は顔を顰めケータイをいじりだした。

これから恋人同士の生活ができるんだよな。

制服デートとか、つか気兼ねなくメールも送れるし電話もできるんだよな！俺彼氏になれたんだから。

気持ちが舞い上がりまくってる俺のケータイにバイブが鳴る。

ノートを取るのを中断してメールを開くと、そこには愛しの倉田さんからのメールが。

“今日途中まで一緒に帰る”

そんなの返事はOKに決まってる。

俺は即効で倉田さんに返事のメールを返した。

ケータイを閉じた先に視線を感じ、顔を上げると目を細くして俺を見ている雅氏。

「お前、何ニヤニヤしてメール打ってんだよ。誰からだよ」

「いいだろ別に。今日は気分がいいからこんななんだよ」

「ああそうですか」

教える気が無い俺に聞く気が失せたのか、雅氏は肩をすくめケータイをいじるのを再開させる。

そんな雅氏に心の中でごめんと謝って、俺は再びシャーペンを握りしめた。

もうすぐ期末テストが終わって夏休みが来る。勿論補講があるから実際は2週間程度だが、それでもやっと訪れる長期休みが嬉しくないわけがない。

長期休みはかき入れ時だ。朝から晩までバイトに入れるからかなり儲けれそうだ。

どうせ夏休みになったところで予定が入ってない日のほうが多分多いんだから全部バイトを入れてしまえばいい。

上手くいったら1ヶ月で10万以上稼げるかもしれない。

バイト代の1割が俺の小遣いになるから1万円。これは頑張らなくてはい！

心の中で闘志を燃やしている俺の傍ではクラスメート達が夏休みの予定を話し合っている。

近場に旅行に行こうとか、バーゲンに行こうとか、それぞれ楽しそうだ。

今年は男友達と遊ぶしけた夏休みから脱却できるんだ。

だって彼女いるんだぜ！しかもマドンナって言われるほどの美少女が！ちよつと口は悪いけど、でも可愛くて仕方が無い彼女が！

あー早く放課後になんねえかな。こんなノート写してる場合じゃねえよな。

「なんかニヤニヤしててキモい」

「……相変わらず容赦ないね倉田さん」

やつとこさ放課後になって一緒に帰れるって言うのに倉田さんの第一声は辛辣な一言だった。

どうやら顔が緩んでたようだ。キモいと一括されて倉田さんはどんな歩いていってしまう。

慌てて追いかけて隣に並ぶ。

やばい、これが青春ってやつかあ。

「……なんでさっきからそんな顔なの？」

「え、これは地顔なんですけど」

「そんなキモくなかった」

「……俺1日にこんなキモいキモい言われたの初めてだよ」

倉田さんはなんとも思わないのか？あの日のしおらしい倉田さんは一体どこに？っていう程ツンツンしてるし。

もしかして付き合いだしたからって雰囲気変えたくないって奴か？だとしたら俺もいつも通り……したいけどこの顔が邪魔すんだよ。

そのままちよこちよこ会話をしながら岐路と一緒に歩く。それだけで結構幸せ。

やっぱ俺って倉田さんのこと好きだったんだなあ。しみじみ思うよ。

「あれ？倉田さん曲がんなえの？家あつちじゃない？」

「今日は病院に行く日なの。何しても変わんないのに」

これ以上この話を続けるのはタブーなんだろうな。

俺はただ何も言わずに気にしない振りをして話題を逸らした。

そっだ、これからは俺も倉田さんを支えていかなきゃいけないんだ。倉田さんは今もずっと戦ってるんだから。

「あーもう駄目だ。もう俺死ぬ。勉強に稽古に両立できるわけが無い」

「拓也諦めないでよー。1とか取ったら夏休み補修だよ」

「澪はいいよ頭いいんだから。もう俺本格的に喋ってる間にも眠気が……」

「寝るなら家でね。こんなところで寝たら拓也見捨てて帰るから」

「……夏なのに心が寒い。澪も冷たい……」

俺と倉田さんの横を通り抜けて言ったのは確か桜ヶ丘の奴だっけ？今時珍しいセーラーと学ランだから多分そっだ。

今の2人はカップルだろうか？かなり仲良さげって言うか、俺と倉田さん見てるみたいだったし。

特に男を完全にスルーしてたあの女。できる。

そういえば俺と倉田さんってお互い苗字だよな。もう付き合ってるんだから名前で呼んでも……

倉田さんの名前って確か……

「幸か」

「は？」

しまった声が出てた！どんだけうつかり者なんだ俺は！

急に名前を呼ばれた倉田さんはぽかんとした顔で俺を見ている。

そりゃ苗字予備だった奴がいきなり名前読んだらビビルだろうけどさ。

「一之瀬の名前って何だっけ？」

「え」

「知らないんだよね。一之瀬の下の名前」

「そ、そんな……告る際にちゃんと名乗っただろお」

「そんな時は一之瀬の事どうでも良かったからさ、どうでもいい事なんて覚えるわけ無いじゃん」

そうだよな、それが倉田さんだよな。でも少しショックだ。

付き合って1週間は経ったのに未だに名前を知られてなかったなんて。しかも知ろうとしなかったんだから、本人完全に名前呼びなんてどうでもいいんだな。

明らかに俺が一方的にうぬぼれてる展開じゃないかコレ。

何となくテンションが下がってきたけど、倉田さんに聞かれたことはちゃんと返事をした。

「春哉、一之瀬春哉」

「ふうん」

倉田さんはどうでもいいのか、相槌だけ打ってこっちに向けてた視線を元に戻した。

甘い雰囲気にはとことんさせてくれなさそうだな。まあいいけどね。その後も何気ない会話をしている内に倉田さんの病院の近くに差し

掛かった。

ここでさよならだな。あーあ、もう少し話したかったなあ。でも焦る必要は無い。だってこれから変える機会はいっぱいある訳だし。結構未練たらただけど、俺は表情を作って倉田さんに声をかけた。

「倉田さんあつちだろ。じゃあまた明日な」

「そうだね、じゃあね春哉。また明日」

……はい？

目を点にしてる俺に倉田さんは悪戯が成功した子どものように笑ってる。

「呼んで欲しかったんじゃないの？急に人の名前呼んできてさ」

「え、いや、そのおー……」

「正直に言いなよ」

「……その通りです」

やばい、見透かされてた！なんかかなり恥ずかしいんだけど！マジ1人ちょー空回ってんじゃない！

倉田さんはクスクス笑いながら俺を見ている。

「倉田さ……」

「幸」

「え？」

「あたしの名前。知ってるじゃん」

それは名前を呼ぶ許可を得たって事か！

なんだか俺なんかが呼んでいいのかって思ったけど、勇気を出して呼んでみる。

「さ、幸。また明日」

「はい、また明日春哉」

倉田さんはそう言っただけで俺に背中を向けて歩いていく。

その姿をポーッと見てたら急に振り向いてきて、かなりびびった。

「あ、そうそう。あんま他人を凝視しないほうがいいよ。変態みたいだから」

「へ？」

「随分羨ましそうにしてたけど」

その言葉に顔が青くなっていく。

もしかしなくても俺、かなり顔に出てた……？

「あのー倉田さん」

「幸つつってんじゃん。あたしは何も知らないよ。春哉が桜ヶ丘の生徒をすんごい羨ましそうな目で見てたなんてね」

見られてた……

倉田さん……じゃなかった。幸はそれだけ言っただけで今度こそ本当に病院に向かって行った。

なんだかかなり恥ずかしい姿を晒したけど、それでも幸が俺の名前を呼んでくれた嬉しさがでかった。

とりあえず俺は先輩に冷やかされないように、赤くなった顔をどうしようか考えてみることにしよう。

新たな一步を踏む土曜日、

自分の名前がこんなに新鮮に聞こえる経験なんてそうないはずだ。

10 俺の彼女を紹介しよう

「幸！今日は俺のバイト先を紹介するぜ！」

「はぁ？」

10 俺の彼女を紹介しよう

幸は突然の俺の言葉に持っていたケータイを落とした。

それを素晴らしい反射神経で地面に落ちる前にキャッチした俺が幸にケータイを返すと、それを受け取りながらも目をパチクリさせた。完全に状況が理解できてない証拠だ。

幸と付き合ってる事を皆に黙って付き合ってたけど、初めて石原以外に幸を紹介する時が来た。

学校の奴らじゃなくて、バイト先の先輩だけだ。

ってか先輩にニヤニヤしながらメール打ってたのを見られて彼女の存在がばれた時、紹介しろってうるさかったから。

この間、初めて一緒に遊びに行った時に撮ったプリクラを見せれば先輩はかなり興奮してた。

そりゃそうだ。幸は可愛いもん、誰から見ても。モデルって言っても通用するくらい可愛い。

言いすぎじゃないぞ。本当に可愛いんだよ！

「え、な、何で？何であたしが春哉のバイト先に？」

「先輩が幸を見たいってうるさくてさあ、プリクラ見たら」

「何で見せんの！？春哉馬鹿じゃないの！？やだ！絶対行かない！ハズすぎ！！！」

「そ、そこまで言わなくても……いいじゃん！俺だって彼女誰かに紹介してえよ！」

俺が食い下があれば幸は真っ赤な顔をして口をパクパク動かしてる。そんなに恥ずかしいのか。ここまで渋られたら可哀そうになるな。しょうがない、先輩には言っとくか。

「無理しなくていいよ。先輩には言っとくし、急にゴメン」

「行ける」

「へ？」

「春哉の彼女としてじゃなくてラーメン食べるだけなんだから。奢ってね」

幸はあんま行きたくないだろう。でも顔を真っ赤にしながらも行くと言ってくれた。

それが嬉しくて、俺は何度も頷いた。

「お、おう！奢ってやる！トッピングにチャーシューつけてやる！」

「あたしチャーシュー麺だから卵トッピングで」

「あ、そう……」

何気に高い物を食う気満々でいる幸は実はちゃっかりしてると思う。俺のバイト先に学生ラーメンがあるって事を幸は知ってるはずなのに、安い学生ラーメンを食べる予定はなさそうだ。

まあ仕方ない。それで幸が来てくれるなら喜んで貢いでやろうじゃないか。

とりあえず放課後に幸をラーメン屋に連れていく約束をして、俺は自分の教室に戻った。

「嘘ー！春の彼女ちよー可愛くない！？やばいやばい！」

「俺の彼女より可愛い……くそお春の奴！あんな可愛い彼女作ったのかよ！」

放課後、幸をラーメン屋に連れて行ってカウンターに座らせてバイトの服に着替えてる俺の横では、幸を覗き込んで騒いでる先輩達。今日の夕方のシフトは俺と女の真由ちゃん先輩、大学生の智樹さんと優太さん。んでここの本店員でおっさんの次郎さん。

何気に次郎のおっさんも混じって幸を見てキヤツキヤと騒いでいる。それを少し誇らしげに見ていると優太さんが俺の肩を掴んできた。

「マジ春のくせに生意気じゃね？なんだよ彼女めっちゃ可愛いじゃん！プリより可愛いし！」

「春貢がされてんじやないのー？気をつけなよー」

「マジで春なんかに先を越された。このまま彼女出来なくて童貞だったらどうしよう俺……！」

「若いつていいねえ。俺も若い時は青春してたもんだ」

それぞれが好き勝手にはしゃいでいる。ってか智樹さん童貞だったのか……彼女いないのは知ってたけど。

もてそうなのになあ、でも智樹さんチャラチャラしてるもんなあ。

その事実になんか驚きながら、俺は幸が食べる様のラーメンを作っている、優太さんが幸に話しかけてるじゃないか！！

慌てて幸の所に行こうとした俺の肩を次郎のおっさんと智樹さんが掴む。

「まあまあ春哉君。彼女がどんな子か、おっさんが見極めてやろう」「俺も協力すんぜー」

「いらないつすよ！放せー！幸がヤリチンの優太さんの毒牙にかか
る〜！」

「あんたそれ優太が知ったらぶたれるよ。いいじゃない春、あたし
も彼女がどんな子か見極めてあげるからねー」

やばい、先輩達マジで勝手に楽しんでやる。

ってかそんな暇があつたら、さっさと他の客にラーメン出せ！他に
も客来てんだぞー！！

その時、ラーメン屋のドアが開いて高校生が3人入ってきた。

中には1人はこないだ幸と見かけた男子がいた。女に完全スルーさ
れてた……あれ？あの野球のバット持つてる奴は見覚えがあるんだ
よな。良く来るから、結構あの男子も来てたのか？

真由ちゃん先輩が席に案内してる中、俺は幸と優太先輩の会話に耳
を傾けながら作業した。

「春どう？あいつちゃんと彼氏やってる？」

「春？春哉の事ですか？どうですかねえ、春哉はヘタレですから」

「あはは！確かに」

え、ちょ……悪口言うな。誰がヘタレだ。

幸の方を振り向くと何ともまあ可愛らしい笑みを浮かべて話してる
じゃないか。少なくとも学校で愛想がないと言われているのが嘘の
ように明るく振舞っている。

まさか幸……優太さんがタイプとか！

そう考えるとしてもたつてもいられなくなって、俺は幸にラーメン
を持って行った。

俺が来たのを見て、雄太さんはやりと笑って幸から離れ、俺の肩
を叩いて厨房に入って行った。

「はい、お待ちどうさん」

「マジ遅い。ってか卵ついてない」

「あ、ごめん」

「春哉、あたしが客だからって気い抜いてんでしょ。ムカつくから店のアンケートに名指しで悪口書いてやる」

「止めてそれ！店長にマジで怒られるから！」

何だよ、俺と優太さんの態度違いすぎない？やっぱ幸はツンデレすぎる。ん？デレあるか？ツンツンじゃね最近。ツンツンツンデレだ。俺仮にも彼氏だよねえ。

とりあえず卵を追加して、俺は渋々持ち場に戻った。

暫くして客入りも落ち着いてきて、俺は再び幸の所に向かった。幸はラーメンを食べながらもケータイをいじっていた。

「ラーメンどう？」

「美味しい。先輩作るのがうまいね」

「いや、それ俺が作ったものもある。トッピングの卵は俺製」

「……さっきから可笑しい味があると思ってたら卵か」

「おい！」

軽い会話を繰り返した後、俺は気になった事を幸にぶつけた。

「幸さー、優太さんに愛想良すぎじゃね？」

「はあ？あたしが愛想悪かったらあんたが気まずいじゃん。空気読んであげたんだよ」

そう言われると言いつけない。

しかも俺の為と言われたらどうしようも無いじゃないか。幸の言葉1つに一喜一憂してる自分が悔しい。

幸は少し意地の悪そうにニヤニヤ笑ってる。

くそお…… 幸は本当に可愛くない事しか言わない。その癖に実は俺の為なんて言われたらそんなの許しちゃうに決まってるじゃないか！

「幸ありえねー！ツンツンすぎる！少しはデレを見せてくれ！」

「はあ？」

ラーメンをズルズル食べながら幸が視線だけをこっちに寄こす。正直マドンナがラーメン食べてる光景は少しだけ不釣り合いだ。つてそんな事はどうでもいい。

なんで優太さんにはあんだだけ愛想良くて俺にはこれな訳！？
ツンデレなんかじゃない。ツンツンだ。これじゃ俺が報われなさすぎる！

「すいませーん！ラーメン替え玉ー！」

「中谷お前よく食うなあ……」

あの野球坊主、毎回替え玉してくんなあ。向こうも高校生だから大して俺と歳変わんなそうなのに。

隣にいる奴らは呆れながらも面白そうだ。

よく学生ラーメンを食いに来る常連の3人。中指に高そうな指輪してる奴と、よく食う野球少年、それと野球少年に突っ込みを入れてる常識人そうな奴。

いつも騒ぎながらラーメンを食っていく。かなり仲がよさそうだ。しかも指輪してる奴、こないだすれ違った時全く顔が分かんなかったわ。ラーメン屋にいくと分かるのにな。

「ほら春哉、早く行きなよ」

「どんだけツンツンなんすか！しかも俺だけ！」

幸にしつしと扱われて仕方なく俺は急いで野球少年の所に向かおう

とする。

そんな俺の背中に幸が一言。

「これは春哉専用。これも立派な特別扱いじゃない？」

「……つくそ〜！」

楽しそうに笑いながらそう言われたら言い返す言葉もない。

負け惜しみだけを言って、俺は野球少年のオーダーを受けに行った。

「替え玉1つですねー」

「あと餃子も」

「え、光太郎も食うのかよ」

「中谷見てたら食いたくなつた。拓也食わねーの？」

「セーレにお菓子貰う気でいたし……でもお前ら食うならなあ、すいませんチャーハンも」

どうやら外人の友達もいるみたいだ。最近の高校生はすごいな、俺も高校生だけど。

野球少年達のオーダーを受けて、再び厨房に入る。

幸はそれをニコニコしながら眺めている。もう何だよ、こんな時にデレを發揮しなくても……

でも言い返す事が出来ない俺は、完璧に幸の尻に敷かれてるようだ。

小さな幸せに浸る土曜日、

俺は絶対に君には敵わないみたいだ。

11 君の全ては手に入らない

「先生、有難うございました」

「いや、ゆつくりやっていこうね」

学校が終わってお袋を迎えに行って先生に挨拶して……先生は笑顔で俺とお袋に頑張って行こうと言ってくれた。

お袋の状態は前よりはかなり安定してるらしい。

確かに前に比べて泣き叫んだり塞ぎこんだりする事は無くなったと思う。嫌いだっただテレビも最近ちよつと見るようになった。

少しずつ、何もかもが上手く行っていると思ってた。

11 君の全ては手に入らない

今日も病院の帰り道、お袋と食材を買いにスーパーに向かう。

最近この日常が当たり前になってきている。少しずつ物事に挑戦しだすお袋を見て安心してる。

少しずつお袋は回復していつてるんだ。もうすぐ元のお袋に戻るかもしれない。

食材をあさっていくお袋の後ろをついて行く。何やら難しい顔をして色々飼っていくお袋は昔のままだ。

少し可笑しくて笑えば「なあに？」と言われて首を振る。そのやり取りが数回あった。

食材を買ってお袋と一緒に飯作って親父と3人で食って、何だか当り前の事が妙に懐かしくて嬉しい。

感謝の気持ちが大切だって親父が言ってたけど、こういう物なのか

も。当り前の事だけど嬉しことなんだよな。
何だか少しだけ幸せな気分になりながら、俺の1日は終わりを告げた。

「ねえ春哉君！あたし彼氏ができた」

「え」

次の日、近所に住んでる2歳下の幼馴染の女の子が嬉しそうに俺に報告してきた。

学校帰りにたまたま会ったその子は可愛らしく成長していた。
ちよつと待て。お前中3だろ。この時期に出来て大丈夫なのかよ。
受験はどうした受験は。

嬉しそうに笑いながら彼氏を俺に見せつけて来る。

「格好いいでしょー春哉君の数倍格好いいよ」

「お前喧嘩売ってんのか」

「でねーもうキスもしちゃったんだー」

俺の話を聞け。え、キス……ええ！？こいつ付き合って何カ月だ！？

「お、おい。お前いつから付き合いだしたんだ？」

「えー3日前」

はやっ！！3日って……ええ！？

俺なんて付き合ってまだ1カ月もたってまだキスしてないのに……
その子はかなりのろけて俺に色々自慢してくる。でもそんなのを気にしてる余裕はなかった。

確かによく考えてみると、俺今まで付き合ってきた2人とは1週間

以内にキスしてた気がする。

あれ？もしかして俺ってかなり遅い？よく考えたら告白した時に抱きしめて以来、幸とはあんま触れてない気が。

辛うじて手を繋ぐ程度はしたけど、雰囲気のできるかなと思って抱きしめようとしたら逃げられるし、正直キスできそうな雰囲気になっても駄目だった。

俺……嫌われてる？それとも手が早すぎる？

でも1カ月って普通に考えたら遅い方だし、俺の考えっておかしい訳じゃないはずだ。

何だか気になっしょうがない。

女々しいけど先に好きになったのも俺だし、ベタ惚れなのも俺だ。幸も俺の事を好きでいてくれるのは分かるけど、でも焦ってるのは俺の方で、もっと恋人らしい事をしたいって思ってるのもきつと俺の方だ。

少し情けないけど、明日幸に言ってみようかな。うん女々しいけど、そういう雰囲気になっても幸に避けられてるんだ。これはもう理由を聞くしかない。

目の前のこいつに後れを取るのには正直言って悔しい。中学生に負けるなんて！

とりあえずこいつに「ちゃんと勉強しろよ」とだけ告げて、俺は明日の学校に備えた。

「遅いな」

「……やっぱり？」

「ああ。遅い」

次の日、俺は昼休みに石原を誘って屋上で弁当を食った。

石原に声をかけるのは少し気まずかったけど、幸の事を相談できるのは石原しかいない。

本人はあっさりOKしてくれて少し安心した。

でも相談したらバツサリと帰ってきた「遅い」の言葉。そう思うのは俺だけじゃないようだ。

「倉田さんが奥手なだけか、お前としたくないのか」

「……後者だったらマジでへこむ」

「まあ本人に聞くしかねえんじゃない？ 案外口が臭いとかかもよ」

「お前幸を馬鹿にしてんのか！」

「そんな訳ねえだろ。口が臭いのはお前じゃねえ？ って事」

ああそれなら納得……できるか！ ちゃんと毎日歯あ磨いてんだよ！でも石原も聞くしかないって言うてるから、もう聞くしかない。

幸に放課後話を聞いてみようと思心に決めて、俺は来る決戦に備えた。

「で、話って何？ 早く帰ろうよ春哉」

放課後、幸を読み出して30分、一向には代を切りださない俺に幸は少しいら立った表情を浮かべている。

クラスメイトも皆いなくなり、教室は俺と幸の2人しかない空間になった。

そろそろいいかな。そう思って幸に話題を切り出す事にした。

「あのさ、俺達って付き合ってるよな？」

「……何いきなり」

よし、言うぞ。だって1ヶ月は経ったんだし。1カ月経ってまだキスもしてないって遅いよな。俺の手が早いんじゃないよな。誰もいなくなつた教室が夕暮れに包まれて赤く照らされていく。俺の緊張が伝わったのか、幸の表情も不安げな物に変わる。

「春哉、どしたの？」

「あ、いやーさ……なあ、その……キスしていい？」

こういうのって聞かないでムードに任せた方がいいんだろうけど、やっぱり1カ月待ってるのはこっちとしては正直不安になる。でも俺の気持ちを知らないのか、幸はどこか逃げるように話を逸らした。

「いやーまだ早いかなあって」

「もう付き合つて1カ月経つぞ。遅いくらいだろ」

そう突つ込めば幸の顔が俯く。

そんなに嫌なのかな？それもショックなんだけど。□そんなに荒れてるかな？

モンモン考えれば、幸は泣きそうな顔をしていた。

「幸？」

「駄目、この身体は倉田幸のだから駄目。幸はまだ起きてない。フアーストキスが知らない間に取られてたら悲しいじゃん」

その言葉に頭に重い石か何かを落とされた気分だった。

そうだ。本当の人格はまだ眠ってる倉田幸。彼女を差し置いて勝手に身体を使う事をしたくないんだ。

でも俺はもっと幸とくっついてたいよ。

自然と落胆した俺の表情を見て、幸の表情が更に悲しみに染まって

いく。

そのまま泣きだした幸を今更抱きしめる事も出来ない。何だか触れることすら駄目な気がしてきた。

誰もいない教室で幸の泣き声だけが響く。

悲しい、幸が好きだ。普通の恋人の様な行為をしたい。倉田幸なんていなくなれば……

そう思った自分が汚くて悲しくなる。

俺はとにかく幸を泣きやますべく、カバンを持って席を立ちあがった。

「まあしょうがねえか。行こうぜ幸、ラーメン奢ってやるよ」

俺は明るくそう言ったけど、幸は泣きはらした目で俺を見てる。

その表情は暗い。

そんな幸について来いとでも言うように、俺は教室を出た。

「春哉」

「ん？」

「窓の外に立って」

急に幸がそう言って来て、俺は言われるが廊下側の窓の外側に立った。

向かい側には教室から幸が窓を挟んで俺をのぞいてる。

廊下に人はいないとはいえ、滑稽な構図だ。

首をかしげた俺に、幸は泣きはらした顔で笑って窓に手をつけた。

「春哉、ちゅーしょ」

幸はそう言って唇を窓に押し当てた。

何だそりゃ。窓越しにキスですか。

呆れた俺を見て、幸が唇を離す。窓には痕が残ってる。

「痕残ってんぞ」

「拭けばいいじゃん。それより、ね」

もう一度幸が窓に唇をくつつける。

本当は窓越しなんかじゃないのがいい。それは幸も思ってくれてる。でも俺達はそれが出来ないんだ。

ゆっくりと俺も窓に唇を押し当てた。

窓は冷たくて硬くて感触なんてわからなかった。でも目の前に窓越しだとしても目を瞑ってる幸が立ってて、それが嬉しくて悲しかった。

自然と涙が頬を伝い、ただ夢中で幸にかぶさるように唇を押しつける。

少しだけでいい。温かさが知りたい。感触が欲しい。そう思っても無機質な感覚しか伝わらない。

それでも俺達は確かにキスをしたんだ。

虚無に包まれる水曜日、

望んだ物は手に入らないと悟った。

12 少しずつ近づいて

「春哉、ラーメン食べに来た」

「お！よお幸」

夏休みに入って1週間、そろそろ夏期講習も始まる間、俺は暇な日全てバイトを入れていた。

幸は結構頻繁に通ってて、今ではもう皆と顔なじみだ。

12 少しずつ近づいて

あの日以来、俺は幸に何かを求めるのは極力控えた。

幸にとつてそれは重荷になってるって理解したから。ただ一緒に入れるだけで幸せだ、そう自分に言い聞かせた。

それで上手く行ってるんだ。何も悪い事なんて起きてない。

今のままで大丈夫、大丈夫なんだ。

すっかりバイト先の先輩たちと仲良くなった幸はラーメンを持ってきてもらうついでに仲よさそうに喋っている。

それをポケーっと見てたら他の先輩に働けて怒られた。

だって彼女が他の男と仲よさそうにしてたら気が気じゃないっつの。

少しだけでもやしながら、俺はラーメンに乗せるためのネギを切る作業に戻った。

「春哉、いつ終わるの？」

「え？バイト自体はあと1時間かな」

ラーメンを食べ終わって少しのんびりしてた幸が俺に話しかけてきた。

今の時間は19時。16時から20時までのシフトだから後1時間でバイト自体は終わる。

まあまかない食って帰る準備したら20時30くらいになるんだけど。

客にラーメンを持って行った後に幸に質問の答えを告げれば、幸は少し考えて俺に振り向いた。

「あと1時間いていい？一緒帰ろうよ」

「え、いいけど」

「夜道は危ないからね、ボディガード必要じゃん」

「あ……ですよねー」

何だよ。そういう意味かよ……物凄い恋人同士の会話じゃんって舞い上がったのに。

でもまあ幸はツンデレだからな。きっと心の中では俺と帰りたいて思ってたんだなこれが。

超プラス思考な事を考えて、今日はまかないを食うのを止めようと心の決めた。

だって幸待たせちゃ可哀そうだもん。今日は我慢だ。家に帰ったら何か適当にあるだろうからカップ麺でも食べばいいか。

あー幸を待たせるのは悪いなあ。早く時間たたねえかな。

時間が早くたてーと思えば思うほどたたないのはお約束って言うやつだろうか。

1時間が経過するのに気持ち的には1時間30くらい我慢した様な気がする。

客足も少しずつ途絶えていくけど、今日は金曜日。23時くらいから飲み帰りのサラリーマンで賑わってくる。

そんなのに巻き込まれるのはマジで勘弁だ。

俺は先輩立ちに頭を下げて着替えはできる荷物置き場に向かう。チラツと幸を見てみると、幸はケータイをポチポチといじっていた。暇そうな顔してるな。マジで申し訳ない。

できるだけ急いで服を着替えて幸の元に向かう。俺に気づいた幸は立ち上がってカバンを持った。

「お疲れ」

「ごめん、暇そうだったな」

「まあね。ケータイいじってたら電池無くなった」

そう言って笑う幸を可愛いなあと思いながら幸がラーメン代を払って店を出る。

外は蒸し暑くて、入り口のドアを開けた瞬間、生ぬるい風が俺達を包み込んだ。

俺はバイトの時に使ってるタオルを首に巻いてチャリを動かす。

「春哉それおっさんみたい」

「うっせー。だって暑いんだよ」

幸を後ろに乗せて二人漕ぎ。最近これが日課だから脚力ついてきた気がする。

幸は俺の後ろで大人しくしてる。このまま家の近所まで毎回送る訳。その間にぼつぼつ会話しながらチャリを漕ぐ。

でも今日は少し違った。

「春哉、今日このあと少し時間ある？」

「えー30分程度なら。一応21時には帰りたいからさ」

「じゃあ30分どっか寄ろうよ」

「どこに？」

「近くの公園」

あ、あそこか。いつも幸送る時に通る公園か。

俺は頷いて、その公園に向けてチャリを飛ばす。

幸からどこかに寄ろうなんて滅多に言わないから少し心の中で舞い上がった。

俺の背中にしがみつく力が少し強くなった気がした。

「幸、くすぐってえって。もうちょい緩めてよ」

「ちよつとぐらい我慢しなよ」

そうピシヤリと告げられて、俺は軽く笑った。

相変わらず口は悪いけど、やる事は可愛い。これが幸のデレって奴だ。

そのまま黙ってチャリを漕いでると、幸がぽつりと言葉を口にした。

「春哉、ありがとね」

「んー？」

「あんたもあたしなんかじゃ不便じゃない？ ままごとの様な恋人でさ」

「何だよ。そんなん思った事ねえよ」

「……そっか」

幸は軽く笑ったけど、そのまま黙りこんでしまった。

何かあったのか？ 急にどうしたんだろ。

じわじわと暑さが俺を襲い、頬を伝う汗をタオルで拭いた。

幸は何も喋らない。ただ黙って俺にしがみついている。

「なあ幸」

「ん？」

「俺、少しは幸を満足させてる？」
「全然」

あ、さいですか。分かつちやいるけど少し傷つく。
あからさまに頂垂れた俺が可笑しかったのか、幸がクスクス笑つて
る。

いや、ここ笑う場所じゃない。

ジト目で振り返れば危ないから前を向けと怒られて渋々前を向いた。

「春哉、ちよつとずつ近づいてね」

「は？何に？」

「あたしに。あたし以上にあたしの事理解して」

難しい事言ってくれるじゃないか。

でもやってやろうじゃないか。それで幸が満足できるって言つのなら。

「……上等」

全て理解してやるよ。悲しい事も嬉しい事も。
だからもつと俺に全てを見せてくれ。

君の体温を感じる金曜日、

全てを理解するからもつと近づいてくれ。

13 果たせない約束をしよう

暗くなった公園には俺たち以外に誰も人はいない。

幸は鞆を俺に押し付けてブランコを漕ぎ出した。

なんだよーブランコで遊びたかっただけかよー俺らもう高2だぜー。そう茶化してやろうと思ったのに、幸の雰囲気はそんな言葉を許してくれなかった。

13 果たせない約束をしよう

鞆をブランコの隅に置いて、幸の隣のブランコに俺も腰掛けた。

幸は黙々とブランコを漕いでいて、中々話を切り出そうとしない。

でも俺は幸が言い出すまで何も聞かなかった。時間がないとか、早く帰らないといけないとか、そんな事を言い出せる空気じゃなかった。

幸は俺に何かを伝えようとしてる。しかも重大な何かを。

それはきつと俺にとっていい報告じゃないんだろう。だから幸はこんなに言うのを戸惑ってるんだ。

この状態が15分くらい続いたかな。

幸はブランコを漕ぐのを止めて、今度は俯いてしまった。

勢いのなくなったブランコは振り子の運動も小さくなり、自然に動きが鈍くなっていく。

ついにブランコがほとんど動かなくなり、幸と俺の視線の高さがつりあった。

じっと見つめる俺に幸はゆっくりと顔を上げる。その表情は困った

ような、でも安心したような……一言で言えば複雑そうな表情だった。

その表情を見て、ますます自分から言い出す勇気がなくなってくる。

“どうかしたのか？何があったのか？”

彼氏として彼女の異変に気づいてるのに、声をかける勇気が出ない俺は何て小心者だろう。

心の中で自嘲気味に呟けば、胸のつつかえは痛みを増した気がした。そんな顔をさせたいわけじゃないんだけどな……いつだって幸の一番叶えたい物を叶える事が出来ない。

それは俺の自信を失わせていくには大きすぎる事柄だ。

「あのさ春哉」

「ん？」

ゆっくり言葉を搾り出した幸。

絶対に聞き逃してはいけない。直感的にそう思った俺は、体ごと幸の方向に少し傾け、話を聞く体勢に入った。

幸は俺の態度を見て、また困ったように笑った。

「聞き流してくれてもいいんだけどさ。あんま真面目な顔されると困る」

「じゃあ幸が上手いこと冗談めかして言うことだな」

「あたしが口下手なの知ってるくせに性格悪いね」

軽い冗談を言い合えば、少し気分が楽になったようだ。幸は少しだけ笑って俺を見てくれた。

ラーメン屋までは普通だったのに、幸は一体どうしたんだろう。

でもその答えはこれから幸が俺に告げるんだ。俺が早まってあれこ

れ言うことはない。

お袋のお陰と言えば響きが悪いが、精神疾患の人間との付き合い方は、そこらへんの高校生よりも上手いって自覚してる。

まずは話し始めるのを根気良く待つんだ。話を遮っちゃいけない。

全部お袋が通ってる精神内科の先生の受け売りだけだね。

でも俺の思いが通じたのか、幸は再び重い口をあけた。

「あたしが二重人格って前にも言ったよね。本当の最初に会った人格のほうの幸はずっと眠ってるって」

「うん、聞いた」

「最近ね、記憶が飛ぶんだ。本の一瞬なんだよ。1分〜2分くらい、もっと短いかもしれない。1日に何回もあれば3日に1回しか来ない日もある」

「うん」

「なんだか良く分からなくて先生に相談したんだよね。あ、先生ってあなたのおばさんも通ってる精神内科のね」

「後藤先生だな」

「そう。でね、言われたんだあ」

“何を？”

そう言うのは躊躇われた。

幸もそのまま言葉を閉ざしてしまった。何となく、何となくなら想像できるんだ。

それは本当なら最も嬉しいことであって、悲しいことではないはずなんだ。泣いて喜べることはずなんだ。

でもきつと俺と幸にとっては不幸以外の何物でもない。

なんで今の時期に？なんでやっと恋人らしくなれていつてるの？なんで今更？

そんな最低なことを考えてるのはきつと俺だけじゃないはずだ。俺

以上に幸の方がきつと戸惑ってる。
自分の出した結論を導くのが恐い。
まだ俺の結論が当たってるわけじゃない。早く幸の口から真実が知りたい。

間違ってるのは俺の方なんだよな。俺が早とちりしてるだけなんだよな。このまま俺たちは普通の恋人でいるんだよな。
お願いだ幸。そう答えてくれ。
でもその願いは簡単に崩されていった。

「先生がさ……言っただ。きつともう1人のあたし……本物の“倉田幸”が目を覚まそうとしてるんだって」

「な、なんで……でもまだ仮定だよな！？決まった訳じゃ……っ！」
「そうだね仮定だね。でもきつと本当のことだよ。経験あるんだよね、記憶抜け落ちるのって。まだ幸が眠ってない時、無意識にあたし達の人格が入り混じってた時、気づいたら朝になってたとか夜になってたとか良くあったから」

「そんな……」

本人目の前に項垂れてしまった俺は最低だ。

悲しいのは幸のほうだ、なのに俺がこんな態度を取ってしまったら幸は気まずいはずなのに。

自分のことしか考えられなかった。あからさまな落胆はきつと幸を傷つける。

幸はもつと恐いだろう。自分の人格がどんどん無くなっていく感覚に晒されていくのは。

簡単に言っただけだけど、記憶が抜けるってきつとすごく恐いことだと思う。でもそれを敢えて軽く言うのは俺に心配をかせかせない為だ。きつとそうだ。

幸はそういう所で優しいから。

普段は気なんか遣わなくせに、そう言う時だけ壊れ物を扱うかの
ような気遣いを見せる。

とりあえず何とか会話を繋げなければと思い、震える声で会話を繋
げた。

「そ、それってさ……幸のおばさん知ってんの？」

「知らない。まだ仮定だから期待させるのも可哀想じゃない。だか
ら先生と確信が持てるまでは秘密ってことにしてるの」

「いいのかよ……」

「いいよ別に。どうせ今言ったら母さんは病院に通えしか言ってこ
ないしね。だあれもあたしの事を必要としなくなる」

「幸……」

「あたしの存在なんか早く無くなれって言っただよ。遠まわしに病
院に行けなんて言ってさ、参っちゃうよね」

笑う幸が痛々しい。つか笑えてねえよ。目が潤んできてるし。

顔上げて涙引っ込めようとするなよ。鼻まですすりだして分かりや
すいっつの。

そんな幸の姿を見てたらなぜか俺までもらい泣き。

ボロボロ泣き出した俺を見て、幸はかなり衝撃を受けたようだ。

「は、春哉！？」

「泣けよ馬鹿！泣いちまえよ！辛いことがあったら泣くのがいいん
だ！そうやって我慢して溜め込むから精神やられちまうんだよ！」

「っ！」

幸の顔がみるみる歪んでいき、クシャツとつぶれた。

そしてブランコから飛び降りて俺にしがみついてわんわん泣き出し
た。

「消えたくないよ！消えたくないよお！まだ倉田幸として生きたい！春と一緒に居たいよお！！」

「俺だつて幸と一緒に居たいんだよ！倉田幸じゃなくてお前と一緒に居たいんだよお！」

人目を気にせずにわんわん泣いた。

事情を知らない他人からしたら高校生の男女がブランコに座って泣いている姿は異常に映るだろう。

でもそんな事を気にしてる余裕は俺たちにはない。

どうやったら幸を助けれる？どうやったら幸とずっと一緒にいられる？

永遠なんて信じてなかった。

今まで出来た彼女だつて好きだとは思つてたけど結婚なんてあり得ないと思つてたし、ずっと一緒にいると言われたら考えられなかった。

でも幸は違う。ずっと一緒にいたいんだ。じいさんばあさんになつても一緒に居たいんだ。

若いから無茶をするって言われてもいい、世間がまだ狭いつて言うのも認める。でもこれは俺の本心なんだ。それだけは否定させない。

それほどまでに思える存在である幸を救えない自分が齒がゆくて憎たらしい。

もつと頭がよければ何とかなつたのか？もつと彼女に対する扱いが上手かつたら満足させたのか？

そんなの全く分からない。

ただできるのはこうして抱きしめて一緒に泣くだけ。ごめんな幸、情けない彼氏で本当にごめん。

そのまま暫く泣き続けてたら、いつの間にか涙も引っ込んだ。

幸は泣き腫らした目で俺を見つめた。

幸の涙を服の袖で拭きながら、俺は幸が再び言葉を出すのをひたすら待つ。今度こそは幸の望みを全て叶えてやる。そう思った。

でも幸は何も話さなかった。そのまま俺にしがみついて肩に顔を埋めた。

どうやら何かを話す気はないようだ。じゃあ今まで待ってた分、俺がお前に話しかければいいな。

「幸、約束しようぜ」

「……何を？」

「ずっと一緒にいるんだ。別れるとかマジあり得ないから。これから何十年もずっと」

「難しい事言うね。先の事なんてわかんない。春哉が浮気するかもよ」

「しねえよ。俺がしないからお前もするな。ずっと俺だけ見てろ」

重い。口ではそう言いながらも幸はクスクス笑った。

少しだけ和んだ空気の中、幸は再び笑うのを止めてポツリと呟いた。

「知ってる春哉、約束って言うのはその人の一部を縛るのと同じなんだよ。テレビで見た事ある」

「ふうん……」

「だから重たい約束は身体が塞がれたように苦しくなる。そしてそれが忘れられない」

だったらその約束は最高じゃないか。

つまり重たい約束、果たせるかも分からない約束を交わしたなら、それを忘れることが無いって事だな。心のどこかにいつもあり続けるって事だよな。

それなら俺はうざったく感じられても、その重い約束を持ちかけるよ。

絶対にお互いがお互いを忘れませんようにって。

果たせない約束だったら幸はきつと忘れない。重く感じて鬱陶しくなるかもしれないけど決して忘れない。

そうしたら俺は幸をずっと手に入れる事が出来るんだ。

「面白いなそれ。じゃあさっき行った俺の約束は絶対実行な」

「だから重いつて」

「それくらいがいいんだって。愛の試練だよ」

「あはは！馬鹿みたい。ばーか、春哉のばーか……」

さあ、果たせない約束をしよう。

それで君の心に永遠に俺が居座り続ける事が出来るなら

14 2人きり

「なあ幸、今週どつか出かけない？」

あの日以来、俺は幸に何かをしてやりたいって思った。まずは思い出作りかな？あ、でも幸と離れ離れになるって決まった訳じゃないし、思い出作りって言い方もおかしいけど。でも幸と何かが欲しい俺は焦ってた。

14 2人きり

幸は目を丸くして俺を見ている。

でもどこかに出かけないか、と言う意味を理解してからは顔を真っ赤にさせた。

おーデートって気付いてくれたかお姫様。ラーメン屋よりもお洒落なところに連れてってやるうじゃないか。

「ど、どこでもいい？」

「どこでもいいよ」

改まって聞いてくる幸が可愛らしい。どこでも連れてってやるよ、金が足りる範囲なら。

買い物に行きたいなら荷物持ちになってやるし、食べたい店があるなら奢ってやる。ゲーセンに行きたいならUFOキャッチャーで何か取ってやるし、特に行きたいところないなら俺が頑張ってプラン作ってやる。

そう意気込んで幸が答えを出すのを待つ。

幸は顔を赤くしながらも小さくポツリと呟いた。

「デイ、デイズニーランド……」
「ランド？」

そうだな、幸は女の子だ。

デイズニーグッズだって何個か持ってるし、デートでデイズニーは関東の学生の王道コースだ。

俺的にはデイズニーよりは富士急派だけど、幸が行きたがってるならデイズニーに行こうじゃないか。

「いいよ、じゃあ10時に東京駅な。そっから行こう」
「ん」

コクリと頷いた幸は可愛い。

なんだかかなり楽しみにしてくれてるみたいだ。デイズニーならそこまで調べなくても、あの空気に包まれてたら何とかなるから俺も助かった。

さあ！デートの日は何の服を着ていくか考えなきゃな！

待ちに待ったデートの日、俺は少し早めに東京駅について幸を待つ。休日の東京駅の人はものすごい。こりゃデイズニーランドも混んでるんだろうなあ。

カップルでデートしてる奴に友達と遊んでる奴、1人で買い物に来てる奴に休日なのにスーツを着て仕事してる奴、様々だ。

時刻は待ち合わせの時間の10分前、そろそろ幸が来るかな？そう思った時ちようどよく幸が現れた。

可愛い花柄のワンピースに身を包んだ幸は可愛い。化粧も

いつもより少し張り切ってるのかな？

なんだかいつも可愛いけど、今日は倍以上に可愛く感じた。

こんな可愛い子と付き合えてるとか、俺夢じゃないんだよねあ……
ぼんやりと考えた俺の視界いっぱいには幸が入ってきた。

「うあつ！」

「ぼけつとしてないで。何してんの？早く行こうよ」

口調は全然可愛くない。

さつさと歩いていく幸を慌てて追いかけて駅のホームに向かった。
ホームで待つてゐる人はかなり多い。この中のどれくらいが同じ駅に行くかは分からないけど、若い子は皆デイズニーに行くんじゃないの
のなあって思う。

電車が到着して皆が一斉に中に入っていく。生憎席は取れなかった
けど、まあ慣れっこだ。

そのまま幸と立って電車がデイズニーランド駅に着くのを待った。

「ミッキー！」

「あ、おい幸！」

デイズニーランド駅についてパスを買って入園すれば、幸は広場に
いたミッキーに目を輝かせて走っていった。

レジャーランド特有の順番に写真撮影と言う奴で、ミッキーと写真
を撮るためにかなりの人が並んでる。

係員の人も40分待ちとか言ってるし、氣ぐるみ相手にそこまでや
るか！？

でも幸が早速並んでしまったので、仕方なく俺も付き合う事にした。
この炎天下の中、何もせずに待つのは正直言って暑い。着ている服

をバタバタ仰いで体に風を送った。

写真撮影が終わってから幸の勢いは止まらない。

まずはファストパスを取るために園内を走り回って、プーさんのハニートップに並んで、2時間待ちのハニートップを乗り終わったら、またファストパスを取りに走る。
もう休みがなさすぎる。

早くも息を切らしてる俺と違い、幸はまだ余裕そう。

その体力どっからくんの？俺の方が普段は体力あるはずなのに。
時間も昼に近づいていたので、俺は幸に休憩がてら昼飯を食おうと誘った。

幸は最初嫌がったけど、本当に昼飯時になったら多分店には入れないぞ、と言えば大人しく付いてきた。

「どこで食いたい？」

「あんまりどこかでーって言うの無いから、歩きながら探そうよ」
「そうしょっか」

そう言っただけで俺の手を幸はぎゅっと握ってきた。

ビックリした俺を見て幸は悪戯が成功した子供のように笑った。

「なんで？彼女が彼氏の手を握ってもおかしい事ないじゃん」

「そ、そうだよな。そうだよな！」

何を遠慮してたんだろ俺は。

俺も幸の手を強く握り返せば「痛い！」と言いつつも幸は笑った。
そのまま笑いながらご飯屋を探して、イタリアン料理店で軽く昼飯を取る事に決めた。

昼飯少し前だけど店内は人でいっぱい、10分くらい待たされた。
でも10分で済んだんならまだマシだろうな。

2人用の小さなテーブルを見つけ、椅子に腰かけて、片方が荷物番、片方がメニューを頼みに行った。

その後はまた2人で話しながら飯を食って少し休憩して再び園内を回った。

いつのまにか時刻は夜になっており、ファストパスも使い果たした俺たちは幸が見たいと言う事でエレクトリカルパレードを見るために早めに席を陣取った。

1時間前なのに、同じ事を考えてる人は意外に多く、最前列を確保できたことはラッキーだったなあ。

時間が迫ってくるにつれて、エレクトリカルパレードを見るために通路に立ち止まる人が増え、後ろを振り返ると、5列位後ろに列ができていた。

そしてスピーカーのアナウンスで特有の音楽が流れ、エレクトリカルパレードが始まった。

通路の真ん中らへんを陣取った俺たちの所にはまだパレードは来ないけど、音楽につられて子供がキャーキャー騒いでいる声が聞こえてくる。

デイズニーでこんなにちゃんとパレード見るって初めてなんだよなあ。

俺はパレードよりはアトラクション派だから。パレードで人が空いてる内にアトラクションに乗ってやろうって考えだからな。

ちらりと横を見たら、幸はまっすぐ通路を見ている。

その目は期待に満ちており、やっぱり今日ここに連れてきて良かったと実感した。

そして俺たちの所にもライトアップされたデイズニーのキャラクターや着飾った人たちが踊りながらやってくる。

子供たちに手を振って、笑いながら、着飾った人たちは華麗にステップを踏んでいく。

すごいな、こんなにキラツキラとライトアップされてんだな、初めて見たよ。ちっちゃい子や女の子は喜ぶよなあこれ。だって綺麗だもん。

幸もうつとりとした顔でパレードを眺めている。

パレードの光が幸を照らし、それが酷く幻想的に見えた。

大丈夫、幸はちゃんとここにいます。

なぜか確認しなければいけないと焦って、幸の手を握った。

驚いた幸がパレードから視線をずらし、俺に向けてくる。それが居心地が悪くて、俺は視線をずらした。

「ほらさ、夏でも夜は冷え込むからさ」

「……馬鹿な冗談は言わない方がいいよ」

そうだな、だって今暑いもん。8月の終わりの夜に冷え込む訳がない。

でも幸も俺の手を握り返してくれた。

もうそれでいいような気がしてきた。だって今俺の横にいるのは間違いない俺の知っている幸だから。

ライトアップされた幻想的な世界の中で酷く怯える自分が滑稽だった。

恐怖を感じる日曜日、

この幻想的な世界に君が溶けてしまわないか不安なんだ。

15 受け入れる覚悟はできてたのに

「すっごく楽しかった!」

「良かったな」

ルンルン気分でデイズニーから出た幸の顔を本当に楽しそうだった。エレクトリカルパレードも終わってグッズを買うために買い物して、そしてデイズニーも閉園。

ギリギリまでいた人たちも皆、駅に向かって歩き出す。

今の時刻は午後の10時。このまままっすぐ帰ったら11時前にはつくだろう。

でもエレクトリカルパレードを見るために最前列に初めから石を取ってたから夕飯を食べてない。

俺と幸は軽くマックかどっかで飯を食って帰る事にした。

電車はすごい人で入るのもやっとの状態だ。

これで東京駅まで行くのはしんどいな……葛西あたりで皆降りてくれないかな。

でも駅に到着する度に少しずつ人が降りて行き、東京駅に着く頃にはある程度のスペースを確保できていた。

降りた俺たちは駅の中にあるマックで一休みしてお互い家に帰る。近くに止めたチャリの後ろに幸を乗せ、いつもの見慣れた道を漕いで帰る。

これから新学期までは休みだ。バイトで忙しいから幸とは会えないけど連絡を取り合うから大丈夫。

いつもの道を曲がり、幸の家の前まで送った。

そして幸を下して帰ろうとした俺の服の袖を幸が引っ張った。

「春哉、ありがとう」

「俺こそめっちゃ楽しかった」

「あたし絶対に忘れないから。ありがとう」

幸が本当に嬉しそうにしてくれた。それだけで満足だ。

幸が服の袖を放して家に帰っていく姿を確認して俺も家に向かってチャリを動かした。

家に帰った俺をお袋が出迎えてくれた。父さんは今風呂に入ってるんだそうだ。

最近お袋の状態は前に比べてかなり良くなった。

外にも出れるしテレビも見れる。まだ薬は飲んでるけど、でもだいぶ前のお袋に近づいた気がする。

本人も働く気力がわいてきたらしく、もう少ししたら職探しをしたいと言っていた。

後藤先生もそれに賛成している。社会に出るのはいいことだと。

少しずつ元の生活に戻ってるんだ。

お袋が働きだしたら、俺はバイトの数を少し減らそう。止めるまではいかない。

あそこは中々居心地もいいし、時給も高いし小遣い稼ぎになるから。

お袋はソファに座ってテレビを眺めている。

その近くに腰をおろして鞆を床に置いた俺にお袋は声をかけてきた。

「幸ちゃん喜んでた？」

「すごく楽しそうにしてた。連れて行って良かったよ」

「そっか」

お袋は幸の事を知ってる。病院で何回か見た事があるらしい。

可愛い子がいるなあと思つてたそうだな。そんな子と俺が付き合つて
るのを驚いてたけど、でも幸を助けてあげてね、と言つてきた。
言われなくても分かつてる。幸は俺が支えればいいんだ。周りが理
解しなくても俺が理解してやればいい。

幸はこの間、もう1人の自分が目覚め始めてると言つていた。正直
ショックだった。

でも俺が幸を支えればいいんだ。俺だけでも幸を理解してやるんだ。
今の幸ももう1人の幸も全部受け入れる。

それで幸が安心して笑ってくれるんなら、俺が頑張つて理解すれば
いい。今日みたいに2人でどこかに出かけて、幸を幸せにできたら
いいな。

あんなに楽しそうにしてくれるって思わなかった。本当に誘つてよ
かった。

また夏休み明けたらだけど、どこかに行きたいな。近場でも何でも
いい。学校帰りでもいい。少し時間があつたら2人で出かけたい。

「幸ちゃんね、前までは無表情で俯いてる姿しか見た事なかったの」
「お袋？」

「でもこの間はね、診察室から出てきた先生と楽しそうに話してた。
幸ちゃんも少しずつ良くなつてるのね」

「どうなんだろうな」

良くなつてると言ふんだろうか。

本人格の幸が目覚めてるってのはいい事なんだろう。客観的に見た
ら。

でもそれは俺と幸ではいいと思えない。幸が奪われてしまふ、そう
感じてしまった。

考えた所で仕方ない。結局俺は何もできないんだから。

それから暫くは毎日幸と連絡を取ってたけど、8月27から急に連絡を取れなくなってしまった。

いや、幸が返事を返してくれないのだ。

何回メールを送っても電話をしても返事を返してくれない。

何かあったんだろうか。不安になったけどどうする事も出来ない。でも母さんは病院で27日に幸を見たと言っていた。

じゃあ敢えて返してこないのかな。それもそれでショックだけど、何か危険な目に遭ってないって言っんならいいんだ。気が向いたらメールをしてくれるだろう。

でも9月になって学校が始まってからも幸は来なかった。

風邪でもこじらせたんだろうか、9月2、3、4……時間が過ぎて
も幸は学校に来ない。

連絡しても返事はくれない。一体どうしたんだ？

不安になって石原に聞きに行ってみても、石原達も分からないって
言っていた。

石原も藤田さんも石原の友達もメールを送ったりしてるらしいが、
誰1人返事が返ってこないらしい。

そんな事ってあり得るのか？

俺だけならまだしも他の皆にも連絡を返さないのはさすがにおかしい。

「幸は何かあったのかな……事件に巻き込まれたとか!」

「いや、担任が倉田さんの家に行ったけど、倉田さんのお母さんは
倉田さんは家にいるって言ってた。少し具合が悪いつて言ってたみ
たいけど……」

「でももう9月7日だぞ。そんな……」

でも幸のおばさんがそう言ってるんだ。事件に巻き込まれたとかじゃないんだろう。

じゃあ幸は本当に何してるんだ？

不安だけが胸の中によぎる。早く幸に会いたい。姿を確認したい。

9月の2週目も3週目も幸は来なかった。

そして9月も最後になるだろう4週目に初めて幸の姿を確認した。学校帰りにお袋を迎えに行こうと病院に向かっていている途中で後姿を発見したのだ。

それまで連絡も取れなかったけど、目の前を歩いている幸を発見した時、思わず走ってしまった。

「幸！」

そう言っただけで肩をつかんだら、驚いたように肩をはねて恐る恐るこっちに振り返った。

その瞳には恐怖が宿っていた。

何かがおかしい。なんで幸はそんな目で俺を見るんだ？

何が何だか分からなくて首をかしげている俺に、幸は何かを話そうと口をパクパクしてる。

それをいつもの様に、幸が話したのを待っていたけど、幸はなかなか話そうとしなかった。

そのまま俯いて怯えてしまう。一体どうしたんだ？

「幸、どうしたんだ？どっか悪いのか？」

「……」

「なんでメール返してくれなかったんだ？石原達も送ってたみたいじゃん」

「……ご、めんなさい」

ポツリと小さな声で謝罪が聞こえた。

何で謝るくらいなら返してくれないんだろう。分からない、幸が何を考えてるのが分からない。

訳が分からなくて、とにかく幸が何かを言ってくれなきゃ始まらない。かっただらから、俺はまた黙って待つことにした。

幸はもう逃げたいと言うオーラが出てたけど、ここで逃がす気はない。可哀想だけどな。

でもその時、幸が小さく声を出した。

「一之瀬、君」

「え？」

一之瀬？俺の事一之瀬って言った？

幸は俺の事春哉って呼ぶのに、なんで今一之瀬って言ったんだ？

何も言い返せない俺に幸は恐る恐る顔を上げた。その目は不安そうに揺れており、本当に俺の事に対しても怯えているようだ。

「ごめん、なさい……あたしは……」

「幸？」

嫌な予感がした。まさか幸は……でもこんな急にくるものなのか？頭が真っ白になってうまく話せない。でも幸は何かを決意したように言葉を放った。

「ずっと幸の中から見てた。貴方が幸を大切に想ってたのも……ごめんなさい」

「嘘、だろ」

「あたしは倉田幸。貴方の知ってる幸が話してたもう1人のあたし」

俺の知ってる幸が眠った。じゃあもう1人の幸がこれからは表に出

てくる。

全てが壊されたと思った。

目の前の幸は頭を下げて、逃げるように走っていつてしまった。
残された俺はどうやっていいのか分からなかった。

全てが壊れた水曜日、

受け入れる覚悟はできてたのに、ショックを受けてる自分がいる。

16 いなくなった君は

幸がいなくなった。そのショックだけが全身をつつみこんだ。誰も助けてくれない。いや、もう終わったんだ。幸はいなくなった。それだけだ。

16 いなくなった君は

その後、幸と会う事もなく9月が終わりを告げた。何が何だか分からなくて混乱したまま終わった9月は味気なく質素なものだった。

これからの不安と不満、そして恐怖。何もかもが自分を包みこんできて、逃げてでも追いかけてくる。

これから俺はどう幸に接したらいい？今までの様に彼氏彼女の様に接する事は出来ない。だって幸はもう俺の知ってる幸じゃない。

幸も俺の事をほとんど知らない。

1から戻ってしまったのだ。自分の片思いの時のように。

今更新しい関係を気付く力は自分にはない。どうやっても俺は新しい幸を今までの幸と比べて評価する。

それは幸が最も嫌う人格否定なのだ。

俺は近づかない方がいいのかもしれない。

10月になって幸が学校に来た。

すれ違ったけど挨拶すらできない俺を雅氏が不思議がった。

「お前倉田さんと仲良くなってたじゃん。今は話さねえの？」
「うん」

「喧嘩か？」
「どうだろ」

はぐらかした俺に雅氏は不満そうな表情を浮かべて首を傾げたけど、俺は言う気はない。いや、言えるはずがないんだ。

今更何を話しかけるんだ。向こうだって話しかけてこない。俺が話しかける必要なんてないじゃないか。

でも未だに受け入れられないから心臓は酷く痛み、悲しさのあまり涙が目を集まってきた。

必死に泣くまいと涙をこらえて俺は再び授業移動のための廊下を真っすぐ歩いた。

大丈夫だ。俺はやっていける、だってこれが本当の結末なんだ。

幸の病気が治った。これは喜んでいいんだ。それで幸との関係がなくなってしまったとしても。

俺はあの約束通り幸の事をずっと想ってる。あの約束を忘れない限り幸はずっと俺の物だ。

自分にそう言い聞かせて奮い立たせる。今の俺にはそれしかできない。

幸が新しい環境に馴染めるかは分からないけど、そこは手伝おう。そのくらいは許されるはずだ。

いや、もう幸じゃないな。仲の良くない俺が呼ぶのも良くない気がする。また倉田さんって呼ばなきゃな。

「倉田さん何かあったのか？」
「さあな」

昼休み、雅氏と弁当を食ってた俺に石原が声をかけてきた。

話があると言われて、弁当を食い終わったら聞くと答えれば待つてると言われた。

さつさと弁当を食って石原のクラスに行けば、倉田さんが気まずそうに藤田さん達からの質問攻めにあっていた。

覗きこんだ俺に石原が気付いたのか、こっちにやって聞いて質問してきた。

それに適当に答えれば、そうかと言って溜め息をつかれた。

「朝からあんな調子でさ、話しかけてもびくつくんだよ。もう俺たち友達だっと思ってたのに、急にあんな態度取られてどうしていいのか……」

石原は倉田さんの事を知らない。幸しか見てこなかったし、幸しか知らない。

だから倉田さんにいつもの様に話しかけて、倉田さんは怯えてしまっているんだ。

せわしなく視線を動かして、しまいには俯いてしまった倉田さんを石原の友達が困ったように笑ってジョークを言った。

「なんだよ倉田さん。そんなキャラじゃないだろ？そこでいつもの毒舌来てよ」

傷ついたように顔を上げた倉田さんに、そいつはさあ来い！と身構えた。

でも幸の毒舌が飛ぶ訳がない。再び黙り込んだ倉田さんに、そいつもお手上げのようだった。

「いつもと違うな。つまんねえよー」

そんな事言つなよ！倉田さんだっけ怖い思いしながら学校に来てる

んだ。

それなのにそんな事を平気で言うなんて……そいつは何も知らないんだから仕方ないかもしれないけど、倉田さんは明らかに傷ついた表情をしていた。

当然だ。自分を否定されてしまったも同じなんだ。ショックも受けなくなるだろう。

それがいたたまれなくて、教室に入って倉田さんの席に向かえば、藤田さんや石原の友達も気づいたのか俺に視線を向けてきた。

「よお一之瀬、倉田さんに用か？でも今日の倉田さんは何にも反応してくれねえよ。お人形さんみてえ」

「お前だからじゃないのか？」

「なんだよそれー！」

そいつの批判を受け流して倉田さんの腕を掴んで立ち上がらせた。恐怖がにじんでいる倉田さんに、ただついてきてとだけ言って教室を出た。

冷やかす奴らと無言で俺に視線を送っている石原に何も言わずに俺と倉田さんは教室を後にした。

「何があつたんだろう倉田さん。石原なにか知ってる？」

「藤田が知らないのに俺が知る訳ないだろ。まああいつが何とかするんだろ」

「そうかねえ……」

屋上について腕を放した俺に倉田さんは距離を取った。

まだ昼休みなので屋上には数人の生徒がいる。見た事のない生徒に倉田さんは軽いパニックを起こしているようだ。

そんな倉田さんを不安がらせないために、なるべく優しい声をかけた。

「あいつらも悪気はないんだ。怒らないでやってくれ」

それだけ言えば、少し冷静になったのか、倉田さんは首を横に振った。

申し訳なさそうにしている倉田さんに少しでも罪悪感が募った。こんなに頑張ってるのに、俺は倉田さんにやっぱりを重ねてしまう。今にも俺を馬鹿にする言葉を言っけそう。だって瓜二つなんだから。それもそう、本人なんだし。

倉田さんは何かを話すのにも勇気がいるらしく、口をパクパクしながら何かを話そうとした。

そして決心したらしく小さな声を出した。

「あ、ありがとう。助けてくれて」

「別に礼言われる程じゃないよ」

「でも、嬉しかった、から……幸がね、言っけた。一之瀬君は優しい人だっけ」

思い出させないでほしい、俺と幸の関係を知っててそんな事を言うのなら倉田さんは酷い人だ。

その仲を引き裂いたのはあんなのに、平気でそれを口にするんだ。少しでも苛ついたけど、表面には出さない様に努めた。それで怒るのはお門違いだから。

教室に戻りたくなさそうな倉田さんに、昼休みが終わるまでここで話してもする？と聞けば嬉しそうに頷いた。

他人と話すのは久しぶりだと言っけ純粹に倉田さんは喜んでたのに、素直に俺は喜べなかつた。

「ねえ、幸はどんな子だった？」

「え？」

「幸の真似、しなきゃって……だから幸の事、色々教えてほしくて」

なんだそりゃ。何で真似する必要があるんだ？

首をかしげた俺に倉田さんは気まずそうな顔をした。でも理由を言ってくれなかったから結局自分で聞くしかない。

「何で真似する必要があんの？」

「だって……皆、幸の事を聞いてくるから。あたし、話についていけなくて……」

「そう言つのやっていると自分が辛くなるよ。止めた方がいい」

「でも……」

「止めて。幸の真似されると頭にくる」

強い声でそう告げれば倉田さんは酷く怯えて小さい声で謝ってきた。それを見て、冷静になって自分が酷い事を言ったと思った。

いくら幸をマネしてほしくないからって、倉田さんは何の悪気もなかったはずなのに。

慌てて謝れば倉田さんは俺の言うとおりだと言って、頑なに首を振った。

倉田さんが表の世界に慣れるのはまだ時間がかかりそうだ。そんな倉田さんに幸がどうなったのかなんて聞けない。それは倉田さん自身も傷つけるだろうし、結果を聞いて俺自身も傷つきそうだから。

そのまま授業開始5分前のチャイムが鳴るまで、俺と倉田さんの間に会話はなかった。

全てに苛立つ月曜日、

同じ姿で全く違う君を見るだけで頭がいかれそうだ。

17 苛立ちは募る

あれから1週間以上が過ぎたけど、倉田さんは未だに学校に馴染んだ様子はない。

よく早退をし、石原達は心配してたけど話しかけてもビビるばかりで話しにならないらしい。

そんな倉田さんに俺は次第に苛立ちを感じていた。

17 苛立ちは募る

倉田さんは少しは周りになじもうとしないのか。確かに前の環境を考えると外に出るのは怖いかもしれない。

だけど話しかけてる相手にあんな反応はない。

俯いて返事もしないで、ただ困ったような顔をして……石原の友達もからかうのを止めて困り果てている。

次第には会話がないって言って違う所に行ってしまった。

それを悲しそうに倉田さんは視線だけで追いかけてるけど、自らアクションは起こさない。

その癖に……

「お、おはよう」

「……おはよう」

俺には声をかけてくるんだから不思議だ。

まあ俺は倉田さんが二重人格だったって事を知ってる、だから向こうも安心して声をかけてくるんだろうけど、ハッキリ言って倉田さんを見るのは俺がきつい。

姿かたちを幸に重ねてしまう。

今はまだ気持ちを整理できないから必要以上にかかわりたくない。支えなきゃいけないってわかってるのに、それが上手くできない自分にも腹が立つし、それに全く気付かない倉田さんにも腹が立つ。でも苛立った態度を見せて怖がらせるのは避けたい。だから普通に返せば倉田さんは安心したような顔をする。

「き、昨日何してた？」

「ずっとバイトだったな」

そうなんだ、そう言って笑った倉田さんは幸と同じだけど同じじゃない。

幸はこんな遠慮気味に笑ったりしない。もう少し小馬鹿にしたように笑うのに。今の倉田さんは愛想笑いを浮かべているだけ。

無理して会話探さなくてもいいよ。俺だって探すの疲れるんだから。無くなってしまった会話に倉田さんは困った顔をしている。そんな顔をしたいたのは俺なんだ、あんたじゃないだろ。

溜め息をついた俺に倉田さんは肩を震わせた。

昼休みの屋上は生徒が多いけど、授業がもうすぐ始まるから、今の屋上に生徒は俺たち以外いない。

もうこのままさぼっちまえ。そう思って横になった俺の側を倉田さんが離れる気配はない。

ここにいる気なんだろうか？

「もどんないの？」

「う、うん。もう少しここにいたいな……駄目、かな」

「駄目じゃないけど」

そう返せば嬉しそうに笑った。

そのまま何かの会話をする訳でもなく2人でボーっとする。授業開始のチャイムが鳴り、俺と倉田さんは完全なサボりに突入した。倉田さんはボーっと屋上からの景色を見ながらポツリと呟いた。

「この間からね、幸と話ができないの？」

「……」

「ずっと話しかけても返事をしてくれない。もういなくなっちゃったのかな」

そんなの俺が知る訳ないじゃないか。

俺にそんな事を言ってくるなんてどういう神経してるんだ。俺が幸の事を好きだって事を倉田さんは知ってるはずなのに。

悪気がないのか知らないけど、倉田さんはポツポツと声を出す。

「幸はあたしを怒ってきた。すごく怖かった……あたしはまだ外の世界に出る勇気がないの」

「は？」

「だから話しかけて元の暗い世界に戻りたいのに、返事をしてくれない」

何が言いたいんだ？外の世界に出たくない？幸がどんな気持ちで倉田さんに体を譲ったと思ってるんだ？

あんなに消えたくないと言いきり叫んでいた幸が消えて、外の世界に出たくないって言うてる倉田さんが外の世界に出てくる。

そんなのおかしいじゃないか？なんで？倉田さんが1番最初の人格だからか？幸が後からできた人格だからか？

後とか前とか、そんなのが本人格と別人格を分けるのか？

消えたいって言うてる奴を本人格にして、生きたいって言うてる奴を別人格として消滅させなきゃいけないのか？

俺と幸がどれだけ受け入れがたいと言うのが分かってないのか？2

人で泣いて約束までして、必死になってきた物をあつさり奪っていったくせに、そんな弱音を吐く。
そんな奴のために俺たちは！！

握り締めた拳が痛み悲鳴を上げている。

そんな俺の気持ちに気付かないのか、倉田さんはまだ自分の思いを打ち明けて行く。

生きるのが怖いとか、周りに馴染めないとか、いつの間にか周りが変わってしまったとか。そんな事ばかり。
自分を嘆くばかり。

幼いころに幸を作り出して、怖い世界から逃げるために幸を表の世界に押し出して隠れておいて、周りの世界が変わってしまったと嘆く。

周りは皆気を使ってるじゃないか！

石原達だって倉田さんに今でも話しかけてるじゃないか！それに返事もしない癖に周りに馴染めないとあるか？努力しないからじゃないか。

怖いのは分かる。数年ぶりに世界に出てきたんだ。他人とかかわるのが怖いのも分かる。でもあんたは周りに何を求めているんだ？
どう動いてほしいんだ？

周りにばかり期待して自分が変わる事もない。そんな奴が嘆いてばかりいて誰が助けるって言うんだ！

幸は自分で行動を起こした。他人とかかわるのが怖くても頑張って今まで生きてきた。

なのに倉田さんは何もしないのに自分の不幸を嘆くばかりいる。

こんな奴のために何で幸は消えなきゃいけないんだ！何で俺たちの幸せを奪われなきゃいけないんだ！

そんなに籠つときたいなら籠つとけよ！幸を表に出せよ！

なんでつなで……！

自然と涙がこぼれて落ちていたらしい俺に倉田さんは驚いていた。何も分かってくれない倉田さんがむかつく。幸が消えたのに、幸のために生きる気のない倉田さんがいらつく。

抑えたはずの声だったけど、口から出た声は思った以上にいら立ちを隠せない声になった。

「じゃあ戻れよ」

「え？」

「戻れよ。自分の中に、幸を表に出せばいいだろ」

「一之瀬、君……」

呆けている倉田さんに俺は胸の内に隠している想いを打ち明けた。あんたはただ嘆いているだけだつて。俺たちは2人で頑張ってきたのに、あんたは周りにばかり求めて自分の事は棚に上げる。

次第に声が抑えが利かなくなっていき、思い切り俺は辛辣な言葉を倉田さんに浴びせた。

「俺と幸がどんな思いでいたかあんたは知ってるのか？ 幸は消えたくないって泣いてたんだ。でも頑張ろうって2人で決めてたんだ。なのにあんたはそれをあつさり奪ったくせに他の奴にばっか変化を求めて、自分は変わろうとしない」

「……」

「石原達が話しかけてるのに倉田さん返事すらしないだろ。それなのに周りに馴染めないとか甘え過ぎなんじゃないのか？」

「だって……」

「俺は正直、こんなことになるなら、ずっと幸のままでいてほしかったよ」

倉田さんの目から涙が落ちる。

自分でも最低な男だと思う。倉田さんにとっては縋れる相手は事情を知ってる家族と俺しかないのに、俺はそれを突き放そうとしてる。

でも倉田さんに関わりたくなかった。

憎かったんだ。俺から大切な幸を奪ったこの子が……憎かった。

憎しみに染まる月曜日、

君の流した涙なんて見向きもしなかった。

18 少しでいいから

あの日以来、倉田さんが俺に話しかけてくる事はなくなった。そうだな。あんな風にいきなり切れた俺に何か話しかけたくないはずだ。

今となつては後悔しか襲つてこないけど、でもそれだけ幸の事が大切だった。幸の事を理解してくれない倉田さんに頭にきた。倉田さんがどんな思いでいるか考えもしないで。

18 少しでいいから

「春哉、お母さんパート先が決まったの」

そう嬉しそうに語るお袋に食べていたポテトチップスが床に落ちた。お袋は汚い！と俺を怒ってきたけど、そんな事俺にはどうでもよかった。働く？お袋が？

お袋の状態はかなり良好な物になっている。もう前のお袋と比べても変わりにくいくらい。でもだからと言って急すぎないか。

お袋は俺の隣に腰掛けて、黙つててごめんとまず謝ってきた。

「ごめんね、勝手にパート探してて。でもね、後藤先生もそろそろ社会復帰してもいい頃だつて言ってくれたの」

「だからって……急だよ」

「少しでも春哉にちゃんとした高校生活を送らせてあげたいのよ。もうお母さんは大丈夫だから」

大丈夫って……

そう言つてのけたけど、正直言つて不安だ。また再発するんじゃないのか。

複雑そうな顔をしていたらしい俺の頬をお袋が引つ張ってくる。

「何すんだよ」

「変な顔しない。でもありがとう、春哉には心配たくさんかけたね」

「あんなの心配の内にも入んねえよ。それよりパート先はどこに決めたの？」

「会社の事務職。お母さんのお友達が紹介してくれたの」

へえ……なんだか知らない間に話がぶっ飛んでたんだなあ。

お袋がそれだけを伝えて、俺にご飯作るから待っててくれと促してくる。

それを手伝うために一緒に台所に向かえば、もう無理しなくていいと言われた。

「春哉、春哉はテレビでも見てなさい。高校生の男の子がそんなお母さんのご飯の手伝いとかしなくていいのよ。お母さんが悪い時は春哉がずつとしてくれたもんね」

「いいよ、そこで無理してまた体調崩されたらたまんねえし。別に嫌だと思つてないから」

ハッキリそう返せば、少し驚いた顔をされた。でもお袋は無理をす。また家事を全部引き受けさせてパートまでさせてたら元の黙阿弥になってしまいそうだ。

お袋は少しずつ俺と親父が支えて行けばいい。

何作る？と聞けば、今日はお刺身だから、そんなに作る物はないと言われた。

正直魚をさばくのは得意じゃない。ていうか余りできない。本当に俺は今回役に立たなさそうだ。

仕方ないから米をといで炊飯器に突っ込んだ後は皿を出したりと簡単な手伝いをしただけだった。
その時にふと思った。

俺はお袋相手ならこうやって助ける気になるのに、何で倉田さん相手に支えようって思えなかったんだろう。

いや、支えようとは思ってたんだ。でも倉田さんを見てたらそんな気がなくなった。

幸に似すぎてたから？いや、それは余りにも理由として最低すぎるじゃあなんで……

色々もくもく考えていると1つの結論に辿り着いた。

そうだ、倉田さんが前を見てくれないから。幸が消えてやっと表の世界に出てこれたのに悲觀的な事を言うから……

お袋みたいに頑張ろうとしてくれないから。

お袋はこうやって少しずつ前進して今のような状態になった。でも倉田さんはいつまえ経っても前を向いてくれない。

いや違う。俺が焦りすぎてるのか？

精神病がそんなに簡単に克服できる訳がない。現にお袋だって今の状態になるのに半年以上かかってるんだ。

お袋だって1カ月過ぎた時期は自殺したいと泣き叫んでいたのに、同じぐらいの期間しか経ってない倉田さんが前を向けるはずがない。

そう冷静に考えてみたら、俺はかなり酷い事を言ってしまったのだ。そのせいでどのくらい倉田さんを傷つけたのか分からない。でも俺のせいで倉田さんは確実に傷ついていた。

泣きそうな顔をしていた。それなのに俺は……

今更に自分がやった事に対する絶望感が襲いかかる。今倉田さんは大丈夫なんだろうか。

連絡を取りたい。でも俺なんかが電話したりメールしたりしたら倉田さんは怖がるかもしれない。脅迫されてるって思われるかも。でも……どうすればいいんだ！

「春哉、どうしたの？」

「え？」

気付いたら立ち呆けてたらしい俺をお袋が覗き込んできた。

心配しか宿していない瞳が俺を捉えている。お袋になら話してもいいのかもしれない。お袋に負担をかけるのは良くないってわかってるはずなのに、誰かに相談せずには居られなかった。

視界が少しずつ緩んでいき、くしゃっと顔が潰れて行くのが分かる。驚いたお袋は俺を椅子に座らせて、どうしたのか聞いてきた。

そして俺はありのままのお袋にはなした。

幸が抱えていた精神疾患は二重人格だった事、それを知ってて幸と付き合った事、幸が消えて別の人格が出てきてしまった事、そしてその人格に幸を重ねて当たってしまった事。

全てを話して多少はすっきりしたけど、心に深く根付くモヤモヤはなくなる事はない。

お袋は悲しそうな顔をして俺に頑張ったね、と告げた。

「そう、そんな事があったの……春哉はどうしたいの？」

「え？」

「その子を支えたいの？それとも幸ちゃんに戻ってきてほしいの？」

「……分からないんだ。倉田さんを学校で支えなきゃって思う。事情知ってるの多分俺だけだし、でも倉田さん見ると幸と重ねて冷静に対応ができないんだ……」

「そっか」

お袋は悲しそうな顔をしたまま俺の手を握った。

お袋の手は水を触っていたから少し冷たく、気持ち良かった。

「春哉、お母さんはね。それをそのまま言った方がいいと思う」

「そのまま？」

「うん。貴方を支えなきゃいけないのは分かってるけど、幸ちゃんを思い出しちゃうから辛いんだって。その子も春哉に頼りたいんだろうけど、それが怖くて本当の事を喋れないんだと思う。だから先に春哉が全部自分の事を打ち明けて。そしてその後、その子の全部を受け入れてあげて。前に春哉がお母さんにそうしてくれたように」

そうだ。お袋がうつ病になって1週間ぐらい経った時、変わってしまった家が嫌で、お袋に切れた事があった。

今の家の状態が嫌なんだ！お袋が変な病気にかかるから、バイト探さなきゃいけなくなっただじゃん！って。

親父にもものすごい怒られて不服だったけど、今思ったら最悪な事を言ったと自覚してる。

でもお袋はそれと同じ事を幸にやれって言うのか？

「わかるよ、春哉が言う言葉は確かにその子を傷つける。でもお母さんの時と違って、春哉はその子を助けようと思ってるじゃない。だからきつと伝わるよ。お母さんの時は春哉本気で切れてたもんね。今の春哉の爪の垢を煎じて飲ませてあげたいくらい」

「……そんなに酷かったっけ？」

「少なくともお母さんは追い詰められたわ。まあ今はもう笑い話だけどね」

そう言ってお袋が笑っている時に親父が帰ってきた。お袋は2人だけの秘密ね、と言って親父を出迎える。

親父は荷物を自分の部屋に置いて着替えてからリビングに入ってた。

「今日パート先が決まったのよ」

「え？いつから働くんだ？」

「来週から。週3で。病院に通いながらだし、まだ治りかけだから無理はするなって先生が言ってたから」

「そうか、体にはため込むなよ」

「分かってる。それで今春哉と話してたのよ。お母さんがうつ病になった時、すぐに春哉が切れたなって」

「ああ、あの時は本気で春哉を殴ってしまったなあ。ははは！まあ春哉に俺も殴り返されたけどな」

笑って話してるお袋と親父に少し呆気にとられた。

もうそれは笑って話せる事なのか？俺的には家庭崩壊一步手前かもって悩んでたのに……

でもこんな風に時間が解決していく物なんだろう。

だから倉田さんもきつと時間が解決していくはずなんだ。明日話しかけてみよう。笑って接しよう。

少しでも倉田さんが俺を抛り所にして現実にも目を向けられるように。

新たな決意をする木曜日、

そして少しずつ成長していく。

19 幻想少年

「来てない……？」

「うん。休み」

次の日、倉田さんの様子を確認すべく教室に足を通わせた俺に石原の友達は倉田さんが来てないと言いつつ放った。そいつも少し言いすぎた事を反省していて倉田さんに連絡したらしいけど返事が来なかったようだ。

19 幻想少年

「倉田さんもしかして俺が言った事気にしてこなくなったのかな……マジ気まずいんですけど」

「何言ったんだ？」

「お前も聞いてただろ？つまんねえよーって言った奴」

ああ、あれか。確かにあれは少し酷かったよな。思わず助け舟出しちまったもん。

でもやっぱり1番の原因は俺じゃないのかな、俺が倉田さんに酷い事言ったから。それがショックで学校に来ないのか？それとも単なる風邪なのか？

後者であって欲しい。

そう願って倉田さんに勇気を出してメールを打ってみた。どうかしたのか、と。

でもその返事が返ってくる事はなかった。

その日も次の日も、また次の日も倉田さんは学校に来なかった。

そのまま1週間が経過して、石原達もさすがに風邪じゃないのかもしれないと話をし出していた。

放課後、石原に声をかけられて、倉田さんの様子を知ってるかと聞かれたけど、こっちも連絡が取れなくて困ってる。

首を横に振れば、そうか……と言って返された。

「もしかしたら登校拒否なんじゃねえの買って騒ぎ出してさ。そんなんじゃないって思いたいけど……」

「登校拒否……」

あながち間違ってるんじゃないのかもしれない。倉田さんは多分学校に来たくないって思ってる。

そしてその原因の一環を作ったのが俺なのも間違ってる。そして石原達の事も。

俺はともかく石原達に非はない。だって倉田さんが二重人格だって知らないんだから。それを知らない奴が人格が変わったなんて思う訳がない。

普通に話しかけてしまはずだ。それが倉田さんに取ってお守になっただけとしても。

いてもたっても居られなかった。

倉田さんが気になる、謝らなきゃ、支えなきゃって思ってるはずなのに、このままじゃ何の意味もない。

気付いたら俺は走って昇降口の階段を下りていた。石原が俺を呼ぶ声も聞かずに。

そのままチャリ置き場までもうダッシュで駆けて、チャリに乗って倉田さんの家に急ぐ。倉田さんの家の正式な住所は知らないけど、近くまで毎日送ってるんだ。道は分かるはずだ。

必死になってチャリを飛ばしていると、曲がり角で曲がってきた奴

とぶつかりそうになった。

「うおっ！」

「ぎゃ——！！！」

まずいつ！どこかぶつけたか！？

腰を抜かして倒れこんでいるそいつに謝るために、チャリを止めて膝をついた。

「わりいつ！どつか怪我した！？」

「拓也大丈夫！？」

「へ、平気……今の尻もちでケツ打っただけ」

そいつは恥ずかしそうにアハハと笑い、立ちあがって尻をパンパン叩いた。あ、こいつ知ってる。良くラーメン屋に食べに来る奴じゃん。

向こうも俺に気付いたらしく、あ！と声を上げた。

「ラーメン屋の人だ。あそこラーメン美味いっすねー」

話しかけられて少し焦ったけど、でも応えない訳にもいかない。一刻も早く幸のそこに行きたいけど、ニコニコ屈託のない笑みで話しかけられたら無視できない。

少し面倒だな、と思いつつも礼を言った。

「どうも、いつも3人で食いに来てますね。1人絶対に替え玉してるし」

「うわー中谷覚えられてる……はずかしー」

「拓也知り合い？」

「いつも食いにいくラーメン屋のバイトの人。制服着た彼女連れて

るから高校生とは思ってたけど、その高校とは知りませんでしたよ」

幸の事もどうやら記憶に残ってるようだ。

あの子可愛いっすね」と言って笑ってる拓也君の横で、少し白けた目で拓也君を見てる女子。横の視線に気づけよ。

またラーメン食いに行くと言われて、それにまた礼を言ってチャリにまたがった。

拓也君はどうやら本当に尻もちをついただけで怪我はないそうだ。良かった、怪我させてたらどうしようかと思った。

「今日は彼女一緒じゃないんですね。いつも一緒に帰ってるでしょ？」

「え、何で知ってた？」

「何でって言うか良く見ますよ。この通り2ケツして帰ったりしてるの」

見られてたのか……恥ずかしいな。それに適当に答えて、今度こそ拓也君と女子と別れた。

急いでチャリを漕いで行く俺を拓也君達の視線が突き刺さった。

「喧嘩でもしたのかな、なんか語りたくない雰囲気だったけど」

「拓也空気読めないから地雷踏んだのかもね」

「えゝもうちょい優しく接してよゝ俺危うくしかれるとこだったんだけど！」

「しかれなかったから良かったじゃない」

「……別にいいし。ストラスはきっと俺を心配してくれるから」

幸といつも別れる家の前でチャリを降りて1軒1軒表札を見て幸の

家を調べて行く。

地道な作業だけど、きつとすぐに見つかるはずだ。

5分探せば倉田の表札はすぐに見つかった。ここであつてゐるよな。間違つてゐる可能性もあるけど、でも時間もないんだ！

思いきつてインターホンを押せば、インターホンから声が聞こえてきた。

多分幸のおばさんの声だ。学校のものです、と言えば玄関におばさんが出てきて家の中に通してくれた。

リビングに通されたけど、幸はいない。

何を言つていいかわからない俺の前に、おばさんが紅茶を出してきた。

「貴方春哉君でしょ？」

「え、なんで……」

「幸がいつも楽しそうに言つてたから。優しい彼氏ができたつて。自分の事を全部話して受け入れてくれたつて」

「幸が……」

幸がおばさんに自分の事を話してたのが意外だった。頑なに他人に言うのを拒んでたから。

その肝心な幸はいないけど、倉田さんはどこにゐるんだろう？

「あの、倉田さんは……」

「幸は今病院にゐるわ。もう暫く戻つてこないと思う。入院してるから」

「なんで……」

「私のせいなのよ。また気付いてあげられなかった……あの子の助けに」

おばさんはソファに腰掛けて頂垂れた。その表情は悲しさと悔しさ

が入り混じっている。

倉田さんは病院に？そんなに具合が悪くなっていたんだらうか……
そしてそれは精神病での入院なのか、それとも肉体的な病気にかか
ってしまっただのか。

でも多分前者なんだろう、それなら俺にも責任がある。

「俺が、悪いんです……」

「春哉君？」

「倉田さんに……言っただんです。幸の代わりに出てきたんだから、
いい加減前を向けて。倉田さんは頑張ってたはずなのに……俺、
当たっちゃったんです。幸がいなくなっただから……」

「……私もね、分からなくなっただの。幸が何を望んでるのか……今
の幸も前の幸も私の大切な幸には変わりないの。理解しなきゃって
思ってるのに、どうしても前の幸と比べてしまった。何も答えてく
れない幸に焦りが出てきて……気付けば前の幸が好きな物を食卓に
並べて、前の幸が好きな服を見つけて可愛いんじゃないって聞いて
……幸がそれを苦痛だと感じてたなんて気付かなかった」

「おばさん……」

「そうよね、前の幸と今の幸は別人。好みだって違うわ。なのに、
何も考えなかった……私も幸を追い詰めてしまった」

悲しそうに涙を流すおばさんに胸が締め付けられた。

お互いに理解できなかった。倉田さんを理解してあげられなかった。
そしてここまで追い込んでしまった。

俺は最低だ。幸も救えずに倉田さんも救えない。

でもおばさんは涙を拭いて、俺に笑いかけた。その目からは俺を責
める者は何も感じられない。

「春哉君、幸はいつも貴方の事を話してた。自分の想像したような
理想的な彼氏だって……幻想の様に思っただ事をしてくれるって。幻

なんじゃないかっていつも思うけど、でも幻じゃない。本当に優しい人だって」

「幸は……夢のような人でした。瞬きして目を覚ましたらいなくなっちゃうんじゃないかってぐらい脆い印象がありました。そんな幸に俺は何もあげられなかった」

「幸は貴方と出会って変わったわ。私にも学校にも後藤先生にもちゃんと目を向けてくれるようになった。自分が誰かに愛されてると貴方がはつきり幸に自覚させてくれたから」

「でも幸は言ってたんです！消えたくないって！まだ存在していた言って！なのに俺は……」

それ以上は言えなかった。言った所でどうにもならないから。でもおばさんは首を振ってハッキリと俺に告げた。

「ねえ春哉君、貴方さえ良かったら待つててあげて。幸をずっと……きつとあの子は一番に貴方に会いに行くはずだから」

待ち続けるよ。だって幸と約束したから、ずっと一緒にいようってその約束が果たされるまでは待ち続ける。絶対に忘れられない約束だから……

頷いた俺をおばさんは笑って有難うと言った。俺は幸を待つしかできない。病院は家族以外の面会は謝絶だそうだ。

精神疾患患者はデリケートだから他人は入れられないんだってさ。まあそうだろうな。だから待つしかない。

いつか幸が帰ってくる事を願うしかないんだ。それが何年先か、もしかしたら何力月先か分からないけど……でも俺は待ち続けるから。

家を出る俺をおばさんは見送ってくれた。

まだ気持ちは晴れないし、正直言って罪悪感はまだに俺の心に根強く残ってる。

だから幸でも倉田さんでも会いに来てくれた時に謝ろう。そして支えるって約束しよう。

夏の終わりを告げる少し冷たい風が吹き、冬を自覚させていく。季節は10月の半ば。これからは寒くなりそうだ。

君の帰りを待つ金曜日、

幻想はいつだって夢の中でしか生きられない。

20 新世界より、愛を込めて

あれから1カ月が過ぎて11月も下旬に差し掛かった。

本格的な寒さが続き、そろそろコート出してもいいんじゃないのかな？ いや、まだ早いかな？ そう思える季節にまでなった。

あと1カ月で冬休みを迎えて、年が明けたらもう4月からは高校3年生になる。

20 新世界より、愛を込めて

お袋はパートを週3のペースで始め出した。

最初は久しぶりの仕事でくたくたになって帰ってきたから、俺と親父も家事を手伝って一緒に頑張った。

その甲斐もあってか、今回はパート先の人と仲良くなったらしくて時々日帰りでバス旅行や温泉旅行に向かっている。

楽しそうなお袋に親父も一安心。もちろん俺もだ。

未だにバイトは続けてるけど、今までとは違い、シフトは大分少なくなかった。

先輩達から今までは俺が入ってくれてたから楽だったって言われるくらい俺は毎日バイトに行ってたからな。

幸がラーメン屋に来なくなった事から、別れたのか？と聞かれた先輩に適当に返事をすれば、なぜか俺は振られたことになってしまい、先輩に泣かれてしまった。

幸がない季節は少し物足りないながらもどんどん過ぎて行き、俺たちはもうすぐ修学旅行だ。

まあもうすぐって言っても年明けなんだけど。12月になんか色々

決めなきゃいけない事があるみたいだ。

旅行代の請求も12月にくるみたいだし。

幸が入院してるって事だけクラスに告げられてる石原達は幸は修学旅行に間に合うのかなあ、と良く話している。

間に合ってほしい。でもそれは幸次第だから俺にはどうしようもできない。

あれ以来幸に家に入っていない。幸の情報も何も手に入らない。何も分からないまま、俺は今まで生活していたように普通の高校生活を送っている。

バイトのシフトは少し減ったけど、でもそれでもバイトは今でも続けている。主に小遣い稼ぎになってるけど。

そう言えば、この間ぶつかった拓也君と俺は友達になった。

拓也君の友達の広瀬君と中谷君もだ。個人的には何だかんだで中谷君と一番仲が良くなったのかもしれない。彼は面白い奴だ。

拓也君達は彼女とはどうなったんだって、しきりに聞いてきたけど、そこは適当にごまかしておいた。

言う必要もないし、言うのは躊躇われた。

幸が帰ってくるまで、この気持ちはずっと封印しておくつもりだ。

幸が返ってきた時に初めて幸に話す事で全てが綺麗に追われる気がするから。

そして学年末の授業が終わり、冬休みが始まった。

生憎にも今日は12月24日。クリスマスだ。今年は家族でしかないクリスマスになってしまった。初めて彼女とクリスマスを過ごせるかもしれないってワクワクしてたんだけどな。

修学旅行のお金は幸のお母さんが出したらしい。参加するかは分からないけど。

俺も何とか母さんが出してくれたおかげで人生初の海外に行けそう。嬉しいけど、どこかもどかしい。

少しだけ友達とダベツて、俺は鞆を肩にかけて学校を出た。

外は凍えるように寒い。帰りにケーキを買ってくるようお袋に頼まれてたからホールケーキ買って帰んなきゃな。
つつてもほとんど俺が食うんだろうけどなあ。

適当に5号のケーキを買って家に帰る。なんだかケーキの箱を持って帰るのは少し恥ずかしかったけど、揺らさないように慎重にチャリを漕いで帰った。

「ただいま」

「お帰り春哉」

出迎えてくれたお袋にケーキの箱を渡して鞆を床に置いた。

お袋はケーキの箱をテーブルに置いて、俺をジッと見つめている。

「何？」

「春哉、さつきお客さんが来たの。貴方に用があるって言ってたんだけど、貴方は帰ってきてないって言ったら、じゃあまた来ますって。まだ間に合うかも」

「え……」

「とても可愛い子だったわよ」

何が言いたいんだ？まさか、そんなまさかだよな。お袋が言いたいのは……いや、勘違いするな。調子のいい自分は勘違いをしてしまうから。

お袋は優しく笑って、早く迎えに行つてあげなさいと言った。
平静を装って「誰をだよ」って少し茶化して言っただけ、お袋の返事を聞いていても経つてもいられなくて、俺はそのまま家をか

け出した。

全速力である場所に向かう。もしかしたらまだいるかもしれない。

5分くらい全速力で走って目の前に見慣れた姿が見えてきた。

ずっと会いたかった姿、ずっと助けたかった姿。おばさんが言った通りだ。俺に会いに来てくれたんだ。

「幸……幸!!」

大声で叫んだ俺の声が聞こえたのか、幸が俺に振り返った。

立ち止まった幸の肩を無意識の内に掴む。どこにも行かないように。でも無意識に叫んだ後に失敗したと思った。倉田さんだった、こんなに無理やり方を掴んで怖がらせたのかもしれない。

でも聞こえてきたのはクスクス俺を小馬鹿にするように笑う声だった。

「倉田、さん？」

「えらい他人行儀だね春哉」

「さ、ち……」

「他に誰がいる？」

これは夢なのか？目の前にいる幸は本当に俺が大好きだった幸なのか？

この笑い方にこの喋り方。間違いなく幸だ。

だらしなく腕の力が抜けて、その場に座り込んでしまいそうになった。だけど幸は笑ったまま。

「え、どうして……俺……」

「話があるんだ。行こう」

幸が俺の手を握って歩き出す。何が何だか分からないままついていた先には人通りの少ない河川敷だった。

あ、あれ中谷君じゃね？

少し離れた場所の中谷君の姿を発見した。金髪の子供とキャッチボールして遊んでいる。酷く楽しそうだけど、あんな小さな子供の髪を金色に染めて……

なんだか2人の姿を見て、少しだけいやされた。そのまま少し離れた場所に腰掛ける。

「幸……」

「ただいま春哉、あたしさ、精神病院にずっと入院してたんだよ。そこで幸と話し合った」

凜とした話し方だったけど、幸の声はどんどん湿りを含んでいく。目には水滴が溜まっていく。

それほど幸にとっては辛い事があったんだ。

幸は全て話してくれた。倉田さんが酷く追い詰められてた事、2人で決めた事、最後は倉田さんが幸に体を譲って消えて行った事、全部話してくれた。

やっぱり俺は倉田さんを追い詰めてたんだな。最低な事をしてしまった……

謝っても許される訳じゃない、でも俺のせいで倉田さんを傷つけてしまった事が悲しかった。綺麗事だし、自分なんかが言っただけで感じただけ。

無意識に幸を抱きしめて、一緒に泣いた。

「幸は消えた。あたしに身体を渡して消滅する道を選んだ」

俺の腕の中で泣きじゃくる幸は本当にか弱い女の子に見える。そんな幸を強く抱きしめて俺は必死で感じる。この幸は俺の大好き

な幸だ。

幸は真っ赤に泣きはらした顔を上げて俺を見つめた。涙に濡れた目は光に反射してキラキラ光ってた。

「だから幸と約束した。絶対に幸せになるって」

「うん」

「……幸せにしてくれる？幸が羨ましがるくらいに」

「約束する。精一杯愛してやる。絶対に幸せにしてやる」

倉田さんは最後、幸に自分が羨ましがるくらい幸せになれって言ったそうだ。

俺はその約束を守らなきゃいけない。幸を幸せにしなきゃ。

「幸せにするよ絶対。今度さ、修学旅行あるんだぜ」

「知ってる」

「自由行動さ、一緒回ろうよ。もう幸が隠すこと何もないよ。幸は幸なんだから」

「うん、うん……」

「俺が知ってる幸だ。やっと手に入れた」

「あたしもやっと手に入れた……」

人がいない事を確認して軽く幸にキスをした。幸は目を丸くしたけど、顔を赤くして笑っただけだった。

なんだか俺も恥ずかしくなって、そのまま手を繋いで笑いあった。初めて交わしたキスは少ししょっぱかった。

「うわゝすつげえ！生チユー見ちやつた！」

「中谷いゝ何で俺たちが隠れるの？あの人たち誰？」

「黙ってるってヴォラク、ばれちゃうだろ」

「ぶー……早くキャッチボールしようよお」

20 新世界より、愛を込めて（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます^^
2人に幸あれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5776j/>

夢想少女

2011年10月5日22時16分発行